

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第113集

水掛渡古墳群C群 (静岡空港C地点)

平成9年度静岡空港県単独整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第113集
水掛渡古墳群C群 正誤表

下記の箇所に誤りがありましたので、恐れ入りますが訂正下さいます
ようお願いいたします。

		誤	正
P 4 2	下から 17行目	鑰环足金物	鍔付足金物
	下から 16行目	鑰环足金物	鍔付足金物
P 4 3	上から 19行目	鑰环足金物	鍔付足金物
p 4 4	下から 6行目	鑰环足金物	鍔付足金物

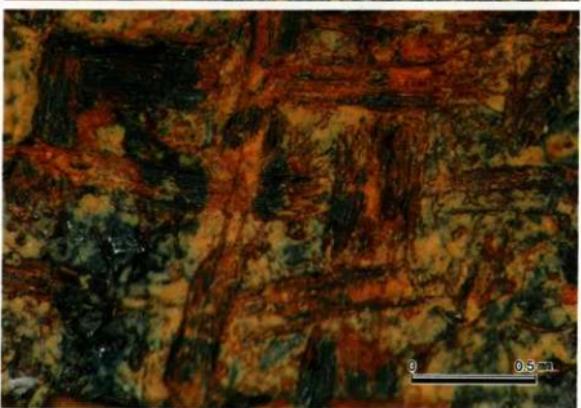
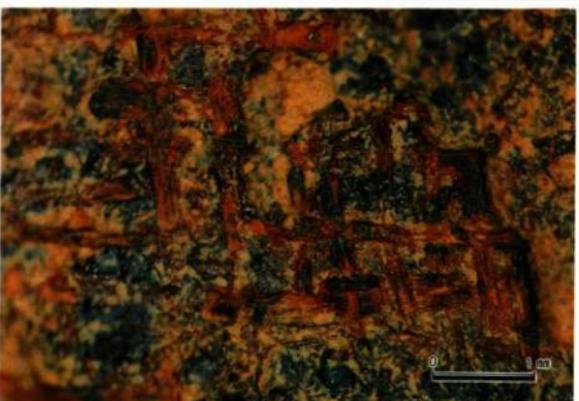
静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第113集

水掛渡古墳群C群 (静岡空港C地点)

平成9年度静岡空港県単独整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所



序

水掛渡古墳群C群は、静岡県のほぼ中央に位置する島田市の南西、牧ノ原台地東端の丘陵上に存在する。現在、付近は茶畠が一面に広がり、近くには赤石山脈に源を発する大井川、遠くには富士山、駿河湾、伊豆半島を望む風光明媚な地である。この地域は古くから交通の要所であったようで、湯日川を隔てたすぐ北側の台地は古代の驛である「初倉驛」推定地として知られている。また付近には多くの群集墳や竹林寺廃寺跡が存在し、歴史的に見ても重要な地域でもある。この地にこのたび静岡空港建設が計画され当古墳群もその計画範囲の中に含まれることがわかった、そのため整備事業の一環として調査が行われることになったのである。

水掛渡古墳群はその中のA群・B群が昭和39年に調査され大きな成果を残している。今回のC地点の調査では円墳3基が確認でき、いずれも内部施設として横穴式石室と墳丘として明確な周溝を有していることが判明した。副葬品としては須恵器をはじめ刀装具や鉄鎌等の武器、勾玉等の装身具が出土し、当時の社会構造や、葬制の一部を知る手がかりになると思われる。

文末であるが、未買収の土地であったにもかかわらず多大な御理解と御協力により、調査の許可をしてくださった地主の谷田川報徳社、株葉氏には深くお礼を申し上げる。また調査ならびに資料整理にご援助、ご協力下さった静岡空港建設事務所をはじめとして関係諸機関に感謝申し上げると共に、現地調査と整理作業に従事した作業員の労をねぎらいたい。

1998年10月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所
所長 斎藤 忠

例　　言

- 1 本書は、静岡県島田市船木字吉崎3524-3、島田市湯日字吉崎山83-1に存在する水掛渡古墳群C群の発掘調査報告書である。
- 2 水掛渡古墳群C群は静岡空港建設予定地内遺跡の一つである。建設予定地内の遺跡はそれぞれ地点名がつけられており当遺跡はC地点にある。
- 3 調査は、静岡空港県単独整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として、静岡県空港建設事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が平成9年8月から平成10年2月まで現地調査を実施した。資料整理は平成10年2月から10月まで行った。
- 4 調査体制は次のとおりである。

平成9年度	所長 齋藤忠、副所長 池谷和三、常務理事 三村田昌昭
	調査研究部長 石垣英夫、調査研究一課長 栗野克巳
	主任調査研究員 羽二生保
	調査研究員 現地調査 鈴木利明、宮崎覚、菊池吉修
	資料整理 菊池吉修
- 5 本書は調査にあたりたった職員の所見をもとに、調査研究員菊池吉修が執筆した。
- 6 現地調査にあたり向坂鋼二氏に有益な御指導、御助言を賜った。ここに記してお礼を申し上げる。
- 7 遺物実測図の縮尺は土器が1/3、金属器、石製品が1/2で統一を図った。全体図、各遺構図の縮尺はそれぞれの図に明記した。
- 8 図版の遺構写真において撮影方向が記していないものは南側より撮影したものである。それ以外のものに関しては撮影方向を記した。
- 9 土層および土器の色調は、新版「標準土色帖」農林水産技術会議事務局監修1992を使用した。
- 10 発掘調査資料は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が保管している。
- 11 調査にあたり地主の株式会社良之助氏には多大な御理解と御協力を賜った。記して感謝の意を表す。

目 次

序 例言

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯と調査の方法 1

- 1 調査に至る経緯
- 2 調査の方法

第2節 調査の経過 2

第3節 基本土層 4

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 地理的環境 5

第2節 歴史的環境 5

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 遺構

- 1 1号墳 15
 - (1) 墳丘と外部施設
 - (2) 主体部
 - (3) 古墳の築造順序
- 2 2号墳 20
 - (1) 墳丘と外部施設
 - (2) 主体部
 - (3) 古墳の築造順序
- 3 3号墳 25
 - (1) 墳丘と外部施設
 - (2) 主体部
 - (3) 古墳の築造順序
- 4 道状遺構 29
- 5 集石遺構 30
 - (1) 集石 1
 - (2) 集石 2

第2節 遺物

- 1 1号墳出土遺物 32
 - (1) 土器
 - (2) 金属製品
- 2 2号墳出土遺物 32
 - (1) 土器
 - (2) 金属製品
- 3 3号墳石室内出土遺物 34
 - (1) 土器
 - (2) 金属製品
 - (3) 石製品
- 4 3号墳閉塞部出土遺物 36
- 5 3号墳周溝出土遺物 36
 - (1) 土器
 - (2) 石器
- 6 集石遺構出土遺物 36
- 7 その他の出土遺物 39

第IV章 まとめ

- 1 古墳 41
- 2 その他の遺構 42
- 3 A群・B群とC群の比較 43

挿図目次

第1図 水掛渡古墳群C群位置図	1
第2図 基本土層柱状図	4
第3図 確認調査区トレンチ土層断面図	4
第4図 調査地点と周辺の遺跡	6
第5図 調査地点と周辺の地形図	10
第6図 調査前の地形図	11、12
第7図 完掘後の全体図	13、14
第8図 1号墳石室実測図	16~18
第9図 1号墳墳丘実測図	19
第10図 2号墳墳丘実測図	21
第11図 2号墳石室実測図	23、24
第12図 3号墳墳丘実測図	25
第13図 3号墳石室実測図	27、28
第14図 3号墳遺物出土状況実測図	29
第15図 集石1断面図	30
第16図 集石構造検出状況平面図	31
第17図 出土遺物実測図(1)	33
第18図 出土遺物実測図(2)	35
第19図 出土遺物実測図(3)	37
第20図 出土遺物実測図(4)	38

挿表目次

第1表 調査工程表	3
第2表 周辺遺跡地名表	7
第3表 出土土器観察表	39、40
第4表 古墳計測表	40

図版目次

- | | | |
|------|--|---|
| 卷頭図版 | 1. 箍口金具付着金
2. 箍口金具付着織維 1
3. 箍口金具付着織維 2 | 図版11 2号墳
1. 石室西側壁（南東より）
2. 石室東側壁（南西より）
3. 石室奥壁
4. 遺物出土状況（北より） |
| 図版1 | 1. 調査地点から北東を望む
2. 岡田原台地から見た調査地点 | 図版12 2号墳
1. 閉塞石
2. 閉塞石（北より）
3. 閉塞石（上より） |
| 図版2 | 1. 遺跡全景（西より）
2. 遺跡全景（東より） | 図版13 3号墳
1. 石室全景（閉塞石除去前）
2. 石室全景（閉塞石除去後） |
| 図版3 | 1. 遺跡全景
2. 遺跡全景（上空より） | 図版14 3号墳
1. 検出状況
2. 石室根石
3. 石室掘り方 |
| 図版4 | 水掛渡古墳群C群全景 | 図版15 3号墳
1. 閉塞石（北より）
2. 閉塞部分遺物出土状況
3. 墳丘東トレンチ北壁周溝土層断面 |
| 図版5 | 1号墳
1. 調査前の状況（北より）
2. 検出状況
3. 石室全景（閉塞石除去前） | 図版16 3号墳
遺物出土状況（北より） |
| 図版6 | 1号墳
1. 石室全景（閉塞石最下段）
2. 石室全景（敷石上層除去後）
3. 石室根石と墳丘内躰層検出状況 | 図版17 3号墳
1. 玉類・耳環出土状況（北より）
2. 刀子・高坏出土状況（東より）
3. 坏・鹿出土状況（西より） |
| 図版7 | 1号墳
1. 石室奥壁
2. 奥壁と東側壁（南西より）
3. 閉塞石
4. 閉塞石（北より）
5. 遺物出土状況（北より）
6. 石室掘り方 | 図版18 集石道構
1. 集石1検出状況（東より）
2. 集石2検出状況（東より）
3. 集石完掘状況 |
| 図版8 | 1号墳
1. 奥壁付近の東側壁（西より）
2. 墳丘西トレンチ北壁上層断面
3. 墳丘東トレンチ北壁土層断面
4. 墳丘北トレンチ西壁周溝土層断面 | 図版19 1号墳出土遺物 |
| 図版9 | 2号墳
1. 検出状況
2. 石室全景（閉塞石除去前）
3. 石室全景（閉塞石除去後） | 図版20 1号墳・2号墳出土遺物 |
| 図版10 | 2号墳
1. 石室全景（敷石上層除去後）
2. 石室根石
3. 石室掘り方 | 図版21 3号墳出土遺物
図版22 3号墳出土遺物
図版23 3号墳出土遺物
図版24 3号墳周溝出土遺物
図版25 3号墳閉塞部・集石道構・その他の出土遺物 |

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯と調査の方法

1 調査に至る経緯

眼下に大井川と志太平野、遙か東に富士山、伊豆半島を望む牧ノ原台地に静岡空港が建設されることになった。建設予定地には多くの埋蔵文化財が存在することが確認されている。そのため静岡空港県単独整備事業の一環として平成9年度から空港建設予定地内の埋蔵文化財調査が行われた。^{水掛渡古墳群}C群は貯水池造成に伴う切り土工事予定地付近にあり、今回、調査が行われることになった。未買収の土地であったが地主の谷田川報徳社の多大な御理解と御協力により調査が可能となったため、工事の主体者である静岡県静岡空港建設事務所と県教育委員会文化課が協議し、^{水掛渡古墳群}静岡県埋蔵文化財調査研究所が県教育委員会文化課の指導の下に調査を行うことになった。平成9年8月より2,200m²を本調査、1,000m²を確認調査として発掘調査に取りかかった。

2 調査の方法

確認調査部分については地形に沿い尾根から谷に向てトレンチを7本設定し、調査を行った。本調査区は樹木の伐採後、重機による表土除去を行いその後人力掘削を行った。土砂の流失を防ぐためしがらを設置、廃土置き場もそれを利用した。測量と空中写真撮影は株フジヤマに委託した。実測図は石室、集石、遺物出土状況は1/10を基本とし、墳丘断面は1/20、地形測量は1/100、墳丘測量は空撮により1/40、1/100で図化した。なお基準杭は地形測量では同土座標に合わせて設定し、各遺構に関しては表土除去後確認できた石室、集石の主軸にあわせて設定した。

写真は現地調査では6×7判（白黒）と35mm判（白黒・カラーネガ・カラーリバーサル）を使用した。遺物撮影には6×7判（白黒）と35mm判（カラーネガ）を用いた。



第1図 水掛渡古墳群C群位置図

第2節 調査の経過

8月4日より本調査区の森林伐採に着手し、終了箇所から地形測量を行った。確認調査区については下草を刈り地形測量を行った。併行して現地プレハブの設置、機材の搬入、しがらの設置、搬入路の整備を行った。以下確認調査と本調査を分けて記す。

確認調査区

9月1日より9月12日まで調査を行った。トレーナーを設定後、人力により掘削を開始した。地表より60cm程掘り下げたところ非常に硬い赤褐色の地山に達し、遺物・遺構共に確認されなかつたため断面を実測し調査を終了した。なお埋め戻しは本調査区の廃土を用いて行った。

本調査区

8月29日より重機による表土除去を行った。古墳の存在が確認できていた1・2号墳周辺は重機による表土除去を行わなかった。東側を1号墳、西側を2号墳とした。尾根上であり、表土は薄く9月1日に終了し、同日から人力による掘削作業を開始した。重機による表土除去中に古墳の石室かと思われる石の集中箇所が新たに2カ所確認できたため、そこから着手した。尾根上の集石は石室であることがわかり、これを3号墳とした。東側斜面の集石は石がどれも小振りで古墳ではないと考えられたが、引き続き調査を行うことにした。

各古墳の石室の主軸がある程度わかった段階で主軸方向とそれに直交する方向に墳丘トレーナーを設定した。トレーナーの断面で周溝の存在が確認でき周溝を掘削することになったが、さらにトレーナー間にサブトレーナーを設定し周溝を断面で確認した後に掘削することにした。11月の終わりから12月の始めにかけて周溝の掘削と集石の検出は終了した。

石室については10月23日に検出状況等の撮影を行い、10月27日より石室内の埋土、落石の除去を開始した。石室内の落石には80cm程度の石も存在し人力では持ち上がりなかつたために抜根機やモッコを用いて除去を行つた。また石室埋土はすべて篠にかけた。落石、埋土を取り除き石室床面に近くなると各古墳から遺物が出土した。特に3号墳は出土量が多く、完形品も多かった。出土状況を記録し、11月の終わり頃には閉塞石を残した状態まで掘り終わった。石室展開図作成は3号墳、2号墳、1号墳の順で作成した。

調査区東側の集石については2カ所に集中城が見られることから西側を集石1、東側を集石2とした。断面実測を行いながら解体を行い、解体終了後は下部遺構の確認を行つたが何も確認ができなかつたため1月6日に終了した。

各遺構の全容が明らかになつた後、ラジコンヘリにより航空測量を行つた。12月22日から2号墳の石室と墳丘盛り上の解体を開始し、3号墳、1号墳の順で解体を行つた。墳丘解体中に1号墳盛り土中に礫層が確認できた。掘り方を検出し実測を行つてある1号墳とその周辺を除いた範囲は1月28日に重機による埋め戻しを行つた。また1月第3週より機材の撤収等を行つた。2月6日に1号墳の実測が全て終了し、埋め戻しを行い、最後に表土流失を防ぐために種苗をして調査は終了した。

月	8月				9月				10月				11月				12月				1月				2月				
週	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	
伐採	—	—																											
地形測量	—	—																											
確認調査（トレンチ調査）			—	—																									
本 調 査	表土除去 人工表土除去																航空測量	—											
	石室検査 周辺掘削																石室解体	—											
撤 収 作 業	石室内検査																堆土廻送	—											
																	石室実測	—											

第1表 調査工程表



1号墳調査状況

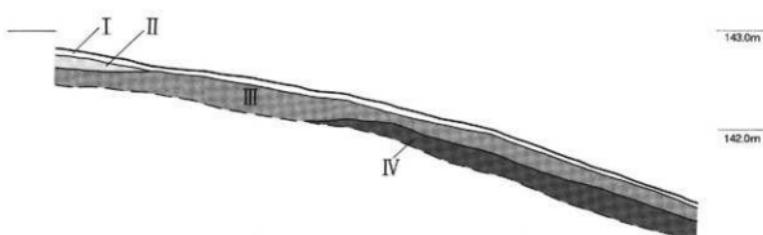
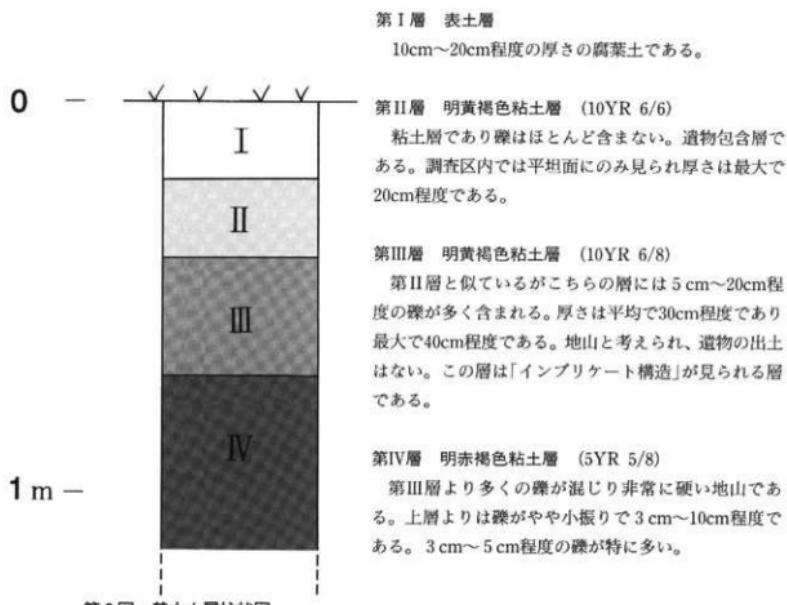


2号墳調査状況

第3節 基本土層

本遺跡の立地する牧ノ原台地は大井川による河川堆積が隆起した台地である。当調査区内では東西方向に並ぶ礫の集中箇所が數か所で確認できた。これは礫が堆積するときに水の流れによって方向性を持って並ぶ「インプリケート構造」と呼ばれるものである。そのためこの礫層を含む層に達することで地山と判断し完掘とした。

丘陵上であるため調査区内全てにおいてこの限りではないが基本は薄い現地表面のすぐ下に遺物包含層がわずかに見られ、すぐに地山となっている。



第3図 確認調査区トレントン層断面図 (1:50)

第II章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

水掛渡古墳群C群（静岡空港C地点）は静岡県のほぼ中央に位置する島田市に存在する。島田市の西側を北から南へと流れる大井川は島田市の南部に至ってその流れを変え、西から東へ流れ島田市を南北に二分する。流れを変えた大井川の右岸は牧ノ原台地となっており、左岸は志太平野が広がっている。水掛渡古墳群C群はこの流れをかえた大井川の右岸、牧ノ原台地東端の標高約140mの丘陵上平坦面に存在する。東名高速吉田インターチェンジより西北西約3.5Km、JR島田駅より南東約4.5Kmの距離である。当遺跡の立地する丘陵は付近で最も高い標高約210mの物見塚より南に延びる稜線が分歧した丘陵の内の一つである。この稜線の南側、西側は榛原町となっている。また東は一段低い標高約90mの岡田原台地、北側は湯日川に隔てられ標高約100mの権現原、谷口原台地となっており、さらにその北は大井川を挟み島田の町が広がる。この遺跡からは北に南アルプスの山々、北東に志太平野、富士山、東には大井川、駿河湾、伊豆半島を望むことができる。

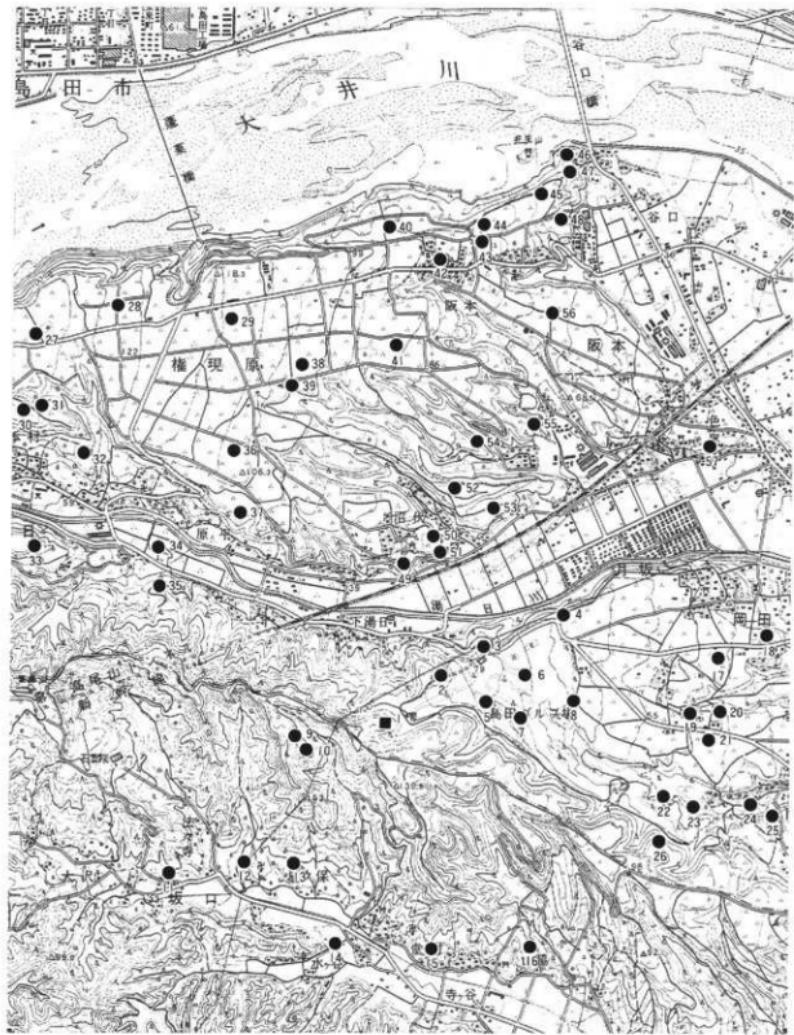
水掛渡古墳群C群が立地する牧ノ原台地は大井川の造った扇状地が隆起したもので、隆起扇状地などと呼ばれている洪積台地である。200万年以前の第三紀鮮新世に海底で堆積した掛川層群の上に、大井川による河川堆積である牧ノ原礫層がおよそ10万年前に不整合に堆積しその後隆起した地層から成り立っている。そのため一見、大井川の川原石と見える礫が多く路頭している。石室の石材として使用されているのもこういった地山に含まれる礫である。牧ノ原台地は開析が進み浸食谷により丘陵、台地が陥れてられており、付近にもそうした地形は多く見られる。現在、台地上の平坦部は茶畠が広がっており、斜面は森林となっている場所が多い。当地点も斜面とわずかな平坦面しかないためか森林となっており、特に本調査区は周囲が杉などが植林されているのに対し雑木林となっていた。

第2節 歴史的環境

旧石器時代・縄文時代

旧石器時代の遺物は原ノ平遺跡(28)、中原遺跡(56)、分布地図には載っていないが東北に位置する御小屋原遺跡、屋敷原遺跡、風西遺跡、吹木又川遺跡からナイフ形石器等が発見されている。

縄文時代の遺跡については当遺跡の立地する丘陵下の岡田原台地と湯日川を隔てた北側に広がる谷口原・権現原台地上に数多く知られている。岡田原台地上の遺跡は岡田原I・II・III遺跡(6)(19)(17)、南原遺跡(25)がある。谷口原台地には東鎌塚原遺跡(27)、東照宮遺跡(29)、本村原遺跡(31)、半段遺跡(32)、えびす森遺跡(36)、大原遺跡(38)、尼沢遺跡(40)、色尾原遺跡(41)、青木原遺跡(42)、宮上遺跡(43)、谷口原遺跡(45)、松ノ木原遺跡(50)、地蔵原遺跡(52)、沼伏神社遺跡(53)が存在する。南側の榛原町海岸遺跡(15)も縄文時代の遺跡とされている。このなかで調査が行われているのは東鎌塚遺跡、えびす森遺跡、尼沢遺跡、青木原遺跡、宮上遺跡である。東鎌塚遺跡では多角形住居を含む住居跡や中期の土器、石器が確認されている。えびす森遺跡では中期中葉の土器や楕円形に並ぶビットが確認されている。尼沢遺跡では中期中葉の住居跡や多量の石器類が確認されている。青木原遺跡では土器、石器が確認されている。宮上遺跡では石錐が確認されている。これらの遺跡の中には石錐が発見されたものがあり、当時この付近では大井川やその後背湿地を対象とした漁労が行われていたと考えられる。



1 水掛渡古墳群C群	古墳時代
2 水掛渡古墳群B群	古墳時代
3 水掛渡古墳群A群	古墳時代
4 庚申塚古墳	古墳時代
5 水掛渡遺跡	
6 開田原I遺跡	縄文時代
7 9TEE古墳	古墳時代
8 六ツ塚古墳群	古墳時代
9 御規様御印場	鎌倉時代以降
10 御陣場古墳	古墳時代
11 作寺古墳	古墳時代
12 下屋敷寺院	
13 星久保古墳群	古墳時代
14 水ヶ谷瑟塚	鎌倉時代以降
15 海戸遺跡	縄文時代
16 神ノ郷古墳	古墳時代
17 開田原山遺跡	縄文時代
18 国王寺南遺跡	奈良・平安時代
19 開田原II遺跡	縄文時代
20 宮裏中原古墳群	古墳時代
21 竹林寺塚寺	奈良・平安時代
22 六ヶ谷瓦窯	奈良・平安時代
23 南原古窯	奈良・平安時代
24 南原瓦窯	奈良・平安時代
25 南原遺跡	縄文時代・弥生時代
26 稲荷山古墳	古墳時代
27 東篠原遺跡	縄文時代
28 原ノ平遺跡	旧石器時代
29 東照宮遺跡	縄文時代
30 本村原古墳群	古墳時代
31 本村原遺跡	縄文時代
32 半段遺跡	縄文時代
33 港口城	鎌倉時代以降
34 船山古墳	古墳時代
35 長軒屋遺跡	弥生時代
36 イビズ森遺跡	縄文時代
37 原ノ平古墳群	古墳時代
38 大原遺跡	縄文時代
39 沼伏古墳群	古墳時代
40 尼沢遺跡	縄文時代
41 色尾原遺跡	縄文時代・古墳時代・奈良・平安時代
42 青木原遺跡	縄文時代
43 宮上遺跡	縄文時代・古墳時代・奈良・平安時代
44 敬神神社跡塚	奈良・平安時代
45 谷口原遺跡	縄文時代
46 谷口原古墳群	古墳時代
47 愛宕塚古墳	古墳時代
48 五輪塔遺跡	弥生時代
49 沼伏遺跡	古墳時代
50 松ノ木原遺跡	縄文時代・弥生時代
51 沼伏古墳	古墳時代
52 地蔵原遺跡	縄文時代・弥生時代
53 沼伏神社遺跡	縄文時代
54 鶴ヶ谷南古墳群	古墳時代
55 鶴ヶ谷古墳群	古墳時代
56 中原遺跡	旧石器時代
57 高根森古墳群	古墳時代

第2表 周辺遺跡地名表

弥生時代

弥生時代の遺跡は少ない。南原遺跡(25)と長軒屋遺跡(35)、五輪塔遺跡(48)、松ノ木原遺跡(50)、地蔵原遺跡(52)である。調査の行われたものはない。

古墳時代

古墳時代になると遺跡数は増加する。これらは主に後期になって急増する群集墳である。当遺跡もその中の一つである。

古墳では水掛渡古墳群A群・B群(3)(2)、9TEE古墳(7)、六ツ塚古墳群(8)、御陣場古墳(10)、作寺古墳(11)、星久保古墳群(13)、神ノ郷古墳(16)、宮裏中原古墳群(20)、稻荷山古墳(26)、本村原古墳群(30)、船山古墳(34)、原ノ平古墳群(37)、沼伏古墳群(39)、谷口原古墳群(46)、愛宕塚古墳(47)、沼伏古墳(51)、鶴ヶ谷古墳群(55)、鶴ヶ谷南古墳群(54)、高根森古墳群(57)があげられる。この中で調査が行われているのは水掛渡古墳群A群・B群、9TEE古墳、愛宕塚古墳、谷口原古墳群の一部、高根森古墳群の一部である。

水掛渡古墳群A群・B群、9TEE古墳は昭和39年に調査が行われている。合計20基の古墳が調査され、いずれも横穴式石室を持つ6世紀後半から7世紀の古墳と判明した。須恵器、太刀、鉄鎌、玉類が出土している。群構成に関する論考や石室の形態分類などの成果が報告されている。当古墳群はこの水掛渡古墳群の一支群であるがこれらに比べ一段高い丘陵上に位置する。愛宕塚古墳は昭和34・35年に調査が

行われ、横穴式石室を持つ後期の前方後円墳であることが確認された。この古墳を中心として谷口原古墳群が存在する。谷口原古墳群はかつて「初倉千塚」と呼ばれ、100~200基の古墳が存在していたといわれる。この古墳群は北側の弁天社群と南側の森下社群に分かれている。森下社群は昭和35年に2号墳、3号墳、昭和37年に6号墳、9号墳、10号墳、11号墳、12号墳、20号墳の調査が行われている。いずれも6世紀中葉以降の横穴式石室を持つ古墳であることが確認されている。高根森古墳群は2号墳が大正4年に、8号墳が昭和48年に調査がされている。両者から太刀や馬具などが出土している。これらも横穴式石室を持つ6世紀から7世紀の古墳である。この他の調査が行われていないものや消滅したものもはいずれも古墳時代後期の可能性が高いと考えられる。消滅したが、特筆すべきものとして6世紀代と考えられている前方後円墳が中原古墳群に存在した。なお古墳時代前期・中期の古墳は確認されていない。

集落跡として確認されているのは宮上遺跡(43)、青木原遺跡(42)があげられる。両者とも調査が行われており、7世紀のものと報告されている。この他に祭祀に関係する遺跡として沼伏遺跡(49)が確認されており5世紀のものと報告されている。この他、分布地図には載せていないが、2km東南に向山遺跡があり、古墳時代後期の窯跡と須恵器の工房跡が確認されている。古墳時代後期からこの地では窯業が開始される。

奈良・平安時代

律令期にはこの付近は遠江国榛原郡の一部として位置づけられる。この時期の遺跡としては古代寺院の存在が確認されている。奈良時代～平安時代中期のものと報告されている竹林寺廃寺(21)である。また南原瓦窯(24)の調査では、奈良時代の須恵器の他にこの寺院の瓦を焼いたことが確認されている。六千ヶ谷瓦窯(22)もこの寺院に関係する窯跡とされている。医王寺南遺跡(18)でも瓦が確認されている。古代寺院に近接してその瓦窯の存在が確認されていることは注目される。南原古窯(23)もこの時期のものと考えられる。

集落としては、宮上遺跡(43)、青木原遺跡(42)があげられる。宮上遺跡は平成元年に調査が行われ、奈良時代の住居跡と掘立柱跡、「驛」の墨書がある須恵器が発見されている。青木原遺跡は平成5・6年に調査が行われ住居跡や掘立柱跡、円面鏡が確認されている。延喜式に記される「初倉驛」との関連が考えられる遺跡である。

経塚も確認されており敬満神社経塚(44)があげられる。島田市史では藤原時代のものとされている。なお敬満神社は「式内社」であるが、現在地には「水害のため移転した」ことが記録に残っており、現在の位置と当時の位置の関連は不明である。

平安時代末になると荘園の存在も記録されておりこのあたりは「初倉荘」及び「賀佐荘」に含まれることが伝えられている。地図には載せていないが北西約3kmに存在する丸山古窯はこの時期のものと報告されている。

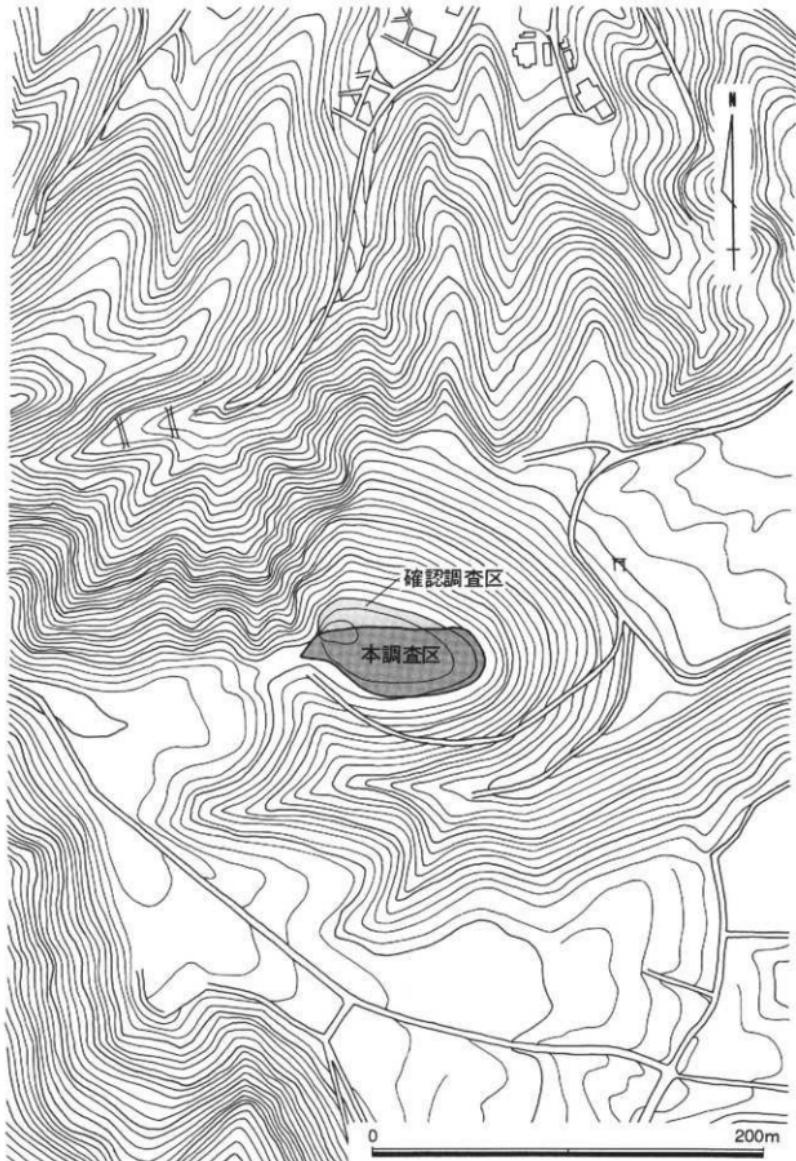
鎌倉時代以降

鎌倉時代は引き継ぎ「初倉荘」「賀佐荘」の一部であったことが伝えられている。この時期の遺跡としては、青木原遺跡(42)で溝と山茶碗が報告されている。「初倉荘」は南北朝になると勝山氏が侵略し、15世紀後半になると今川氏がこの地方に勢力を伸ばしてくる。今川氏の滅亡後は、武田氏と領有を争った後、徳川氏の領地となる。家康が江戸に移ると掛川城主山内氏の領域となる。中世の遺跡としては湯ノ城(33)、水ヶ谷経塚(14)、権現様御陣場(9)があげられる。江戸時代になるとこの付近は掛川藩や旗本による支配と島田代官による支配が地域と時期を混在してみられる。

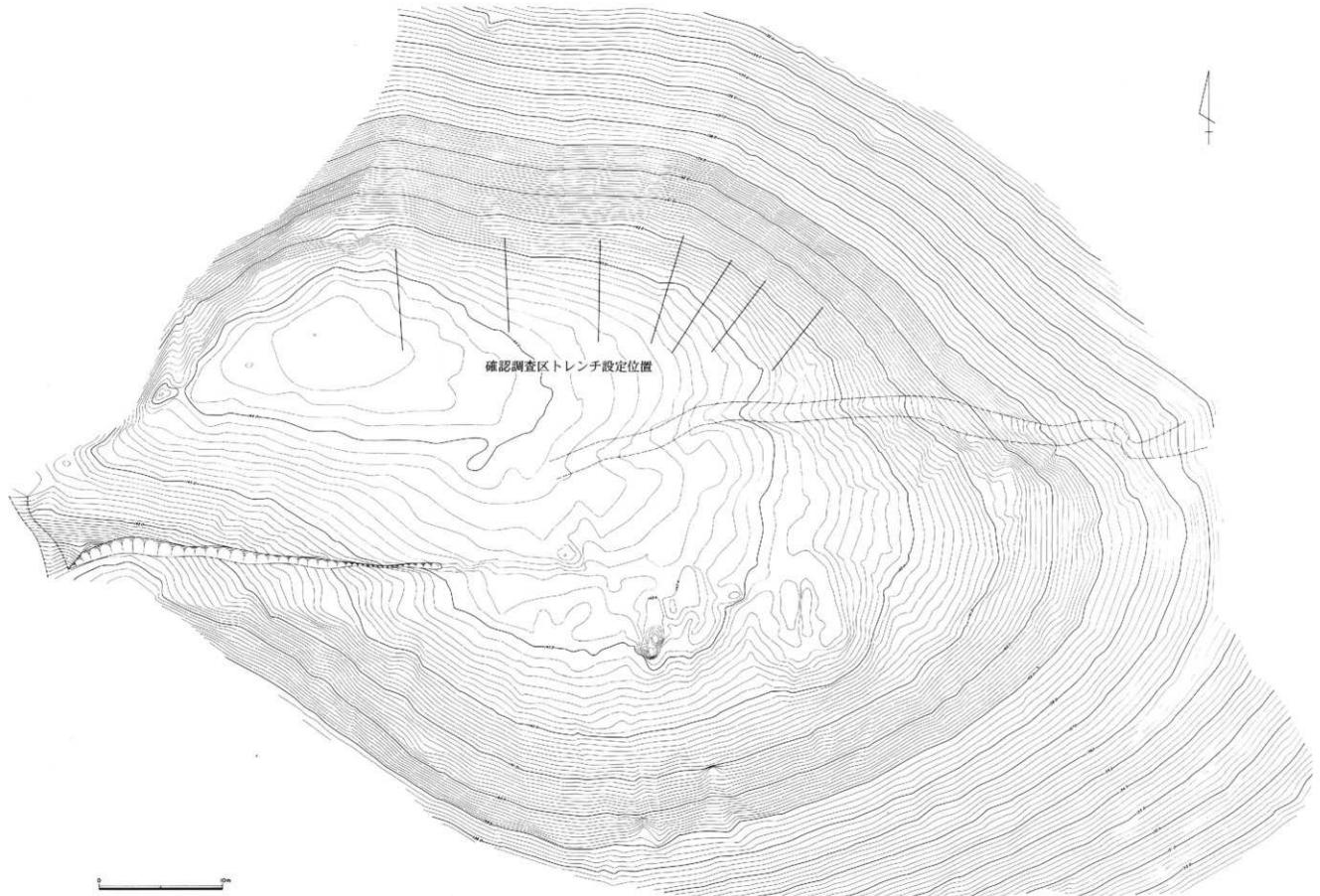
明治時代になると牧ノ原台地は開拓が行われ、現在では台地上は茶畠が広がり、平野は住宅や工場が立ち並んでいる。

参考文献

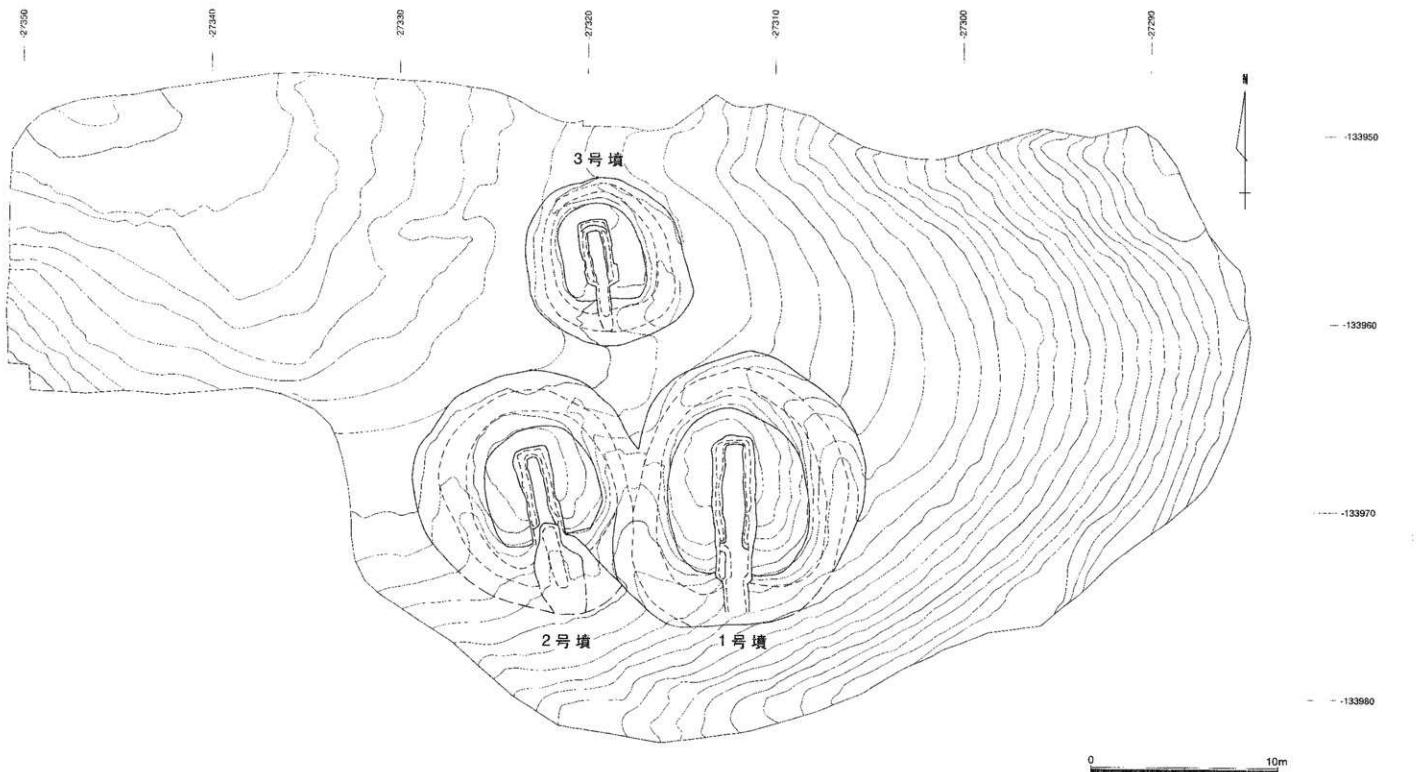
- 後藤守一 1922 「遠江国榛原郡初倉村高根森古墳」『考古学雑誌』
第一二卷八号
- 山村宏 1953 「谷口原古墳群」
『東海道新幹線静岡県内工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
静岡県教育委員会
- 島田市誌編纂委員会 1978 『島田市誌』上巻
- 島田市教育委員会 1980 『竹林寺廃寺跡』
- 島田市教育委員会 1981 『南原瓦窯跡』
- 島田市教育委員会 1989 『東鎌塚原遺跡』
- 島田市教育委員会 1990 『宮七・尼沢遺跡』
- 島田市教育委員会 1991 『えびす森遺跡』
- 島田市教育委員会 1992 『原ノ平遺跡』
- 島田市教育委員会 1992 『屋敷原・御子屋原遺跡』
- 島田市教育委員会 1994 『御子詫原遺跡』
- 島田市教育委員会 1996 『青木原遺跡』
- 島田市教育委員会 1996 『島田風土記 ふるさと初食』
- 島田市教育委員会 1997 『向山遺跡』
- 静岡県文化財保存協会 1965 『島田市水掛渡古墳群発掘調査報告書』
- 静岡県教育委員会 1988 『静岡県文化財地名表II・静岡市以西』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1997 『丸山古窯跡』



第5図 調査地点と周辺の地形図（1：2,500）



第6図 調査前の地形図（1：300）



第7図 完掘後の全体図（1：200）

第III章 調査の成果

第1節 遺構

今回の調査では3基の古墳と2基の集石、道路状の遺構が確認できた。古墳については調査区の南東側のものを1号墳、南西側のものを2号墳、北側のものを3号墳とした。集石は2つの集中箇所に分けられることから、西側のものを集石1、東側のものを集石2とした。

古墳はいずれも円墳で周溝を持ち、内部主体は横穴式石室であった。棺の存在は確認できなかった。

以下、遺構別に調査の成果を記す。

1 1号墳

(1) 墳丘と外部施

a. 古墳の位置と調査前の状況

1号墳は尾根上平坦面の南東端に位置する。西隣に周溝を重ねる形で2号墳、北西側に3号墳が存在する。古墳の南側と東側は急斜面となっている。調査前は雜木林となっており、墳丘の盛り上がりは確認できたが、周溝の存在は確認できなかった。墳丘中央部付近に幅約1m、長さ約4m、深さ約50cmの落ち込みが存在した。

b. 墳丘形および規模

墳形は円墳であるが南北にやや長い。規模は本文群中最大であり、南北10.5m、東西9.0mである。これは細長い石室をなるべく少ない土量で覆った結果と考えられる。高さは現状で石室入り口から見て1.6mである。本来はいま少し高いものであったのだろう。

c. 墳丘盛り土

おそらく周溝や主体部の掘削の時に出た土を利用していると考えられる。特に突き固めた様子は確認できなかったが、特筆すべきものとして5cm～15cm程の礫を多く含む厚さ20cm程の層が墳丘の東西で確認できた。また旧地表面であったと考えられる層のすぐ上の層は多くの炭化物を含んでいた。

d. 周溝

周溝は表土除去後、墳丘の東西南北方向に設定したトレンチの断面で確認できた。幅は最大幅3.3m(墳丘東側)、最小幅2.0m(墳丘南西側)であり、深さは地表面から最深で0.3m(墳丘北側)である。全周はしておらず、石室入り口部である南側はなだらかに地表面とつながっている。これは浸食を受け消滅した可能性も指摘できるが、木米存在しなかった可能性もある。西側は2号墳の周溝と重なっているが切り合いは不明である。周溝の堆積土は自然浸食されて流れ出た墳丘盛り土であろう。

(2) 主体部

a. 主体部の形状・規模

残存状況

主体部は横穴式石室であった。残存状況は西側壁の石の大半が抜き取られ消失しており、調査前に確認できた落ち込みはこの部分であった。床石の東側も剥がれていた。天井石は無く、石室内には多数の礫が存在した。

形状

この横穴式石室は無袖式のものであるが、閉塞部で幅を狭め袖部を意識しているかのようである。玄室はやや胴が張り、「ハ」の字状に開く羨道がつながる。南側に開口し主軸はN-15°-Wである。

規模

規模は全長7.47m、玄室長4.40m、羨道長3.07mであった。幅は奥壁0.98m、奥壁から3.25m地点で最大幅1.17m、閉塞部分の奥壁側で1.05m、開口側で0.96m、開口部で1.20mであった。高さは奥壁部分で敷石上面より測って1.28m、奥壁より2.60m地点で最も高く残存し1.49mであった。

床面

床面は5cm～10cm程度の円礫を敷いた上に扁平な10～30cm程の割石が敷き詰めてあった。扁平な割石は元位置を留めないものもあったが、精緻に組み合わされて敷き詰められていた様子が確認できた。敷石の範囲は下面の円礫が奥壁より3.20m地点まで、上面の割石が2.85m地点までである。床面地山の標高は141.500mである。

石材

自然石のまま用いているが、床石や奥壁、側壁の一部に人為的に割られたものを用いている。奥壁は最大幅40～50cm程、側壁は20～40cm程の大きさである。

石積みの方法

奥壁の積み方は広口横積みである。一部に割石を用いており、現状で8石4段からなる。持ち送りではなく、西側下段から交互に積んだようである。側壁は根石の一部が広口横積みであるが大半が小口積みであり、わずかに持ち送っている。根石の一部には割石を用いる。目地は縦方向ではあまり通っていないが横方向では一部通っている。

閉塞状況

閉塞状況は奥壁より4.47m地点から1.05mの範囲で確認でき、高さは現状で1.0m、側壁等と同じ20～30cm程度の石を用いる。閉塞石の積まれ方は整然としており、東西3列を原則として積まれている。最下段の玄室側から東西方向に並べ、次に中央の列、最後に開口側の列を並べ、2段目以降も同様に積んだと考えられる。

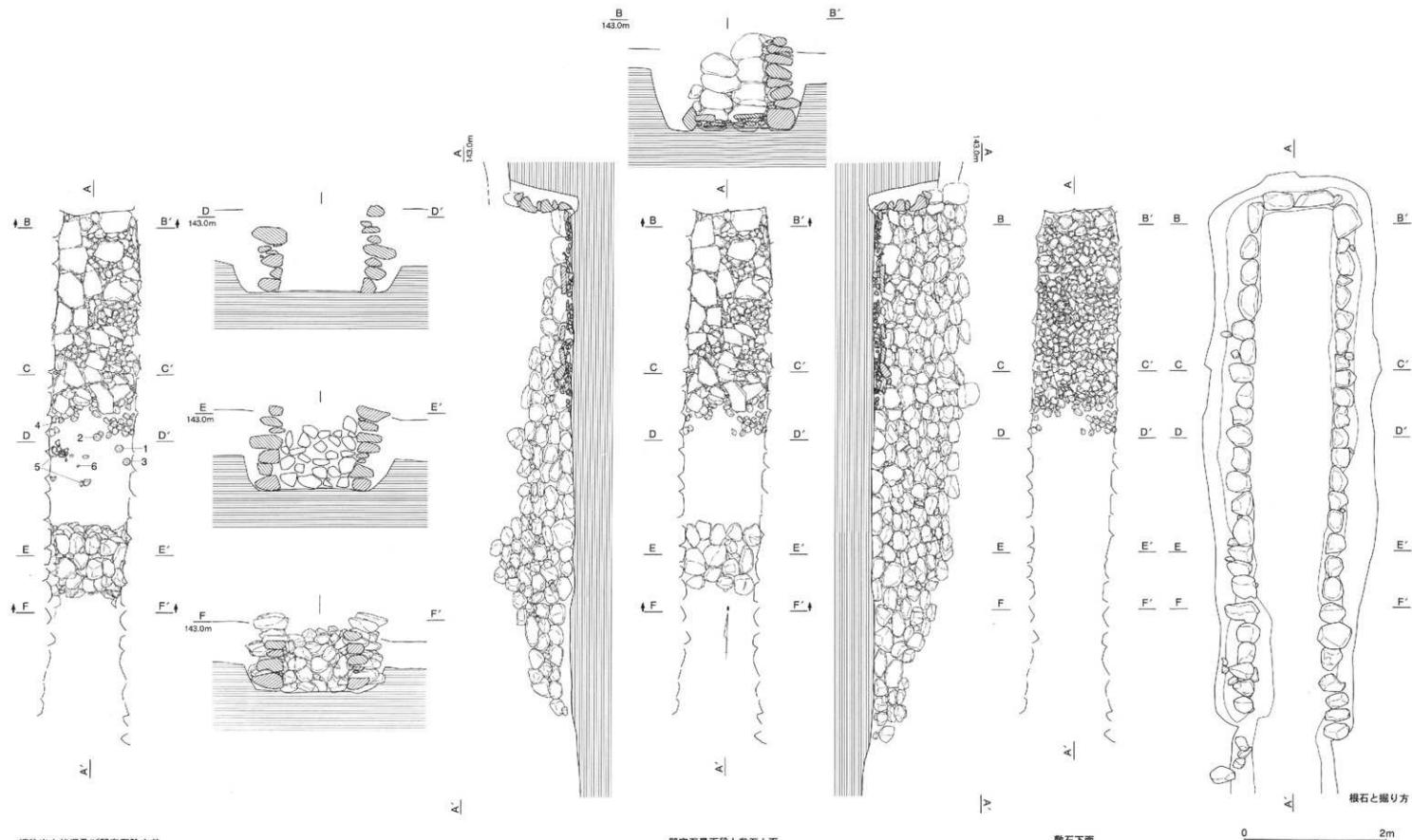
b. 掘り方

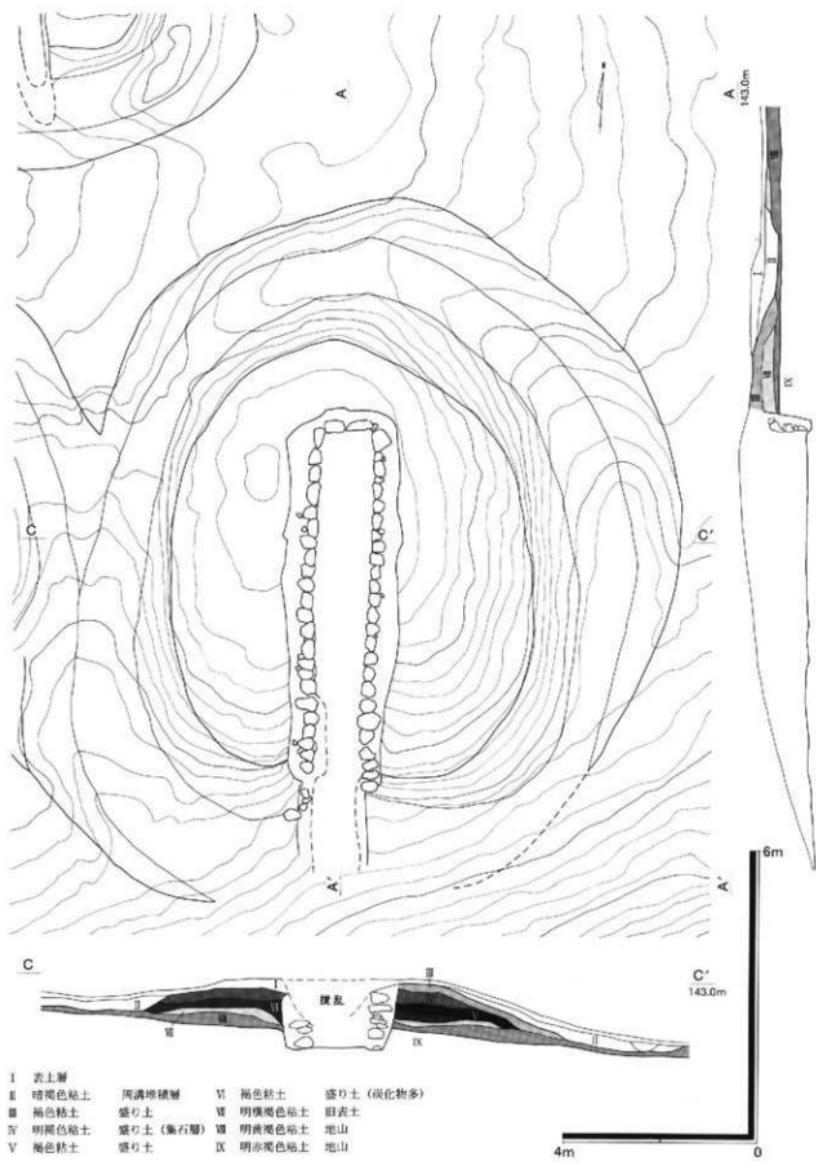
石室の堀方は石室よりわずかに大きい程度で、長さ7.5m、最大幅は奥壁付近で2.3mである。根石の据え付けのための堀方は溝状で深さ7～8cm程度である。また石室の裏込めは土のみであった。

c. 遺物出土状況

出土遺物は須恵器が6点、金属製品が28点出土した。須恵器は平瓶が2点、壺が4点、いずれも玄室内の閉塞石よりで敷石を施していない所で出土した。金属製品は鞘金具が3点、大刀の一部が1点、刀子片が2点、その他鐵錠と思われる鉄片が22点出土したが、これらはいずれも石室内埋土を篤にかけたところ発見できたもので、敷石を施しているあたりからの出土である。(第17図)







第9図 1号墳墳丘実測図 (1 : 100)

金属製品はいずれも破片であるので大刀、刀子、鐵が本來それぞれ何点副葬されていてたか断定できないが、太刀の鞘は1点以上、大刀は1点以上、刀子は1点以上副葬されていた。

(3) 古墳の築造順序

石室の構築と墳丘の築造を併行して行ったと考えられる。主体部分の掘削の後に、奥壁の最下段ついで東西側壁を積み裏込めを行った。それを旧地表面と同じくらいの高さになるまで繰り返した。石積みが旧地表面と同じ高さになった後は石室の構築と墳丘の盛り土を併行して行ったと考えられる。石室が一段積み上ると裏込めをし、ある程度まで積み上ると、同じくらいの高さになるように墳丘に盛り土をしたと考えられる。そのため旧地表面の層までは掘り方が明確に見えるのに対して、盛り土を行つたと考えられる層は盛り土と石室裏込めの境目は見えない。ただし最初から現在見られる形に墳丘を盛つただのではなく石室を覆う程度に一次的に盛り、石室構築終了後、二次的な盛り土を行い現在の円墳にした可能性がある。周溝の掘削時期は定かにできないが、周溝の土を用いて墳丘築造に使つたと考えられるならば墳丘盛り土の段階よりやや前であろう。この他築造に関わるものとして、盛り土内の集石層の存在がある。これは墳丘の補強のためと、周囲に多く存在する礫を積めることで土量を減らすため等の目的が考えられる。また墳丘内の炭化物を多く含む層は古墳築造に先立ち周囲の焼き払いを行い、この際に出た炭化物が混入した層であろうか。

2 2号墳

(1) 墳丘と外部施設

a. 古墳の位置と調査前の状況

2号墳は尾根上平坦面の南に位置する。東隣に周溝を重ねて1号墳、北東に3号墳が存在し、古墳の南側は急斜面となっている。調査前は雑木林となっており、墳丘の存在は確認できたが、周溝の存在は確認できなかった。また露頭している石材もあった。古墳の西側にはごく最近、重機で削られた跡がありその時の廃土と考えられる土が墳丘の西側から北側にかけて見られた。

b. 墳丘形および規模

墳形は円墳である。規模は南北6.0m、東西6.0mであった。高さは現状で石室入り口から見て1.1mである。本来的にあまり高いものでないだろう。

c. 墳丘盛り土

墳丘の盛り土は旧地表面上に確認できた。おそらく主体部と周溝掘削の際の廃土を利用していると思われる。地山より礫等が少ないと盛り土の間に礫等を排除したものと考えられる。

d. 周溝

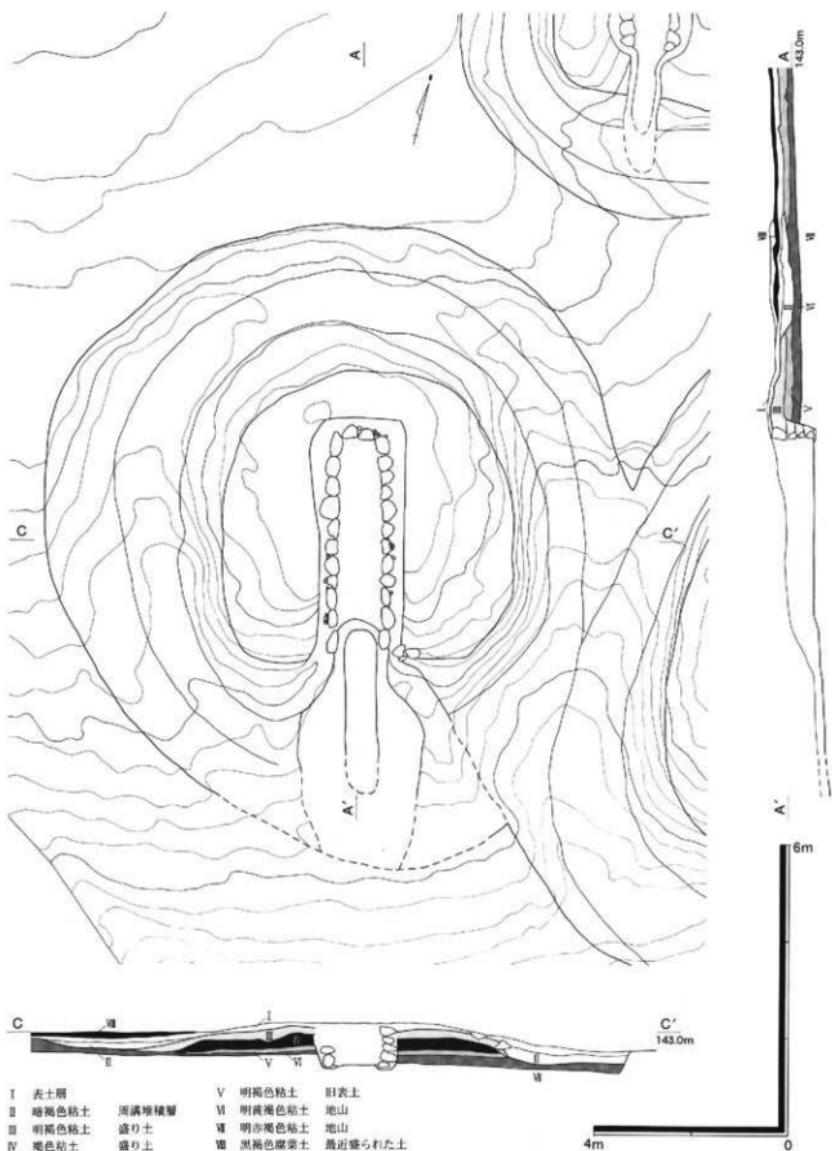
周溝は墳丘トレンチの断面で存在が確認できた。幅は最大幅3.3m(墳丘西側)、最小幅2.4m(墳丘北側)であり、深さは地表面から最深で0.2m(墳丘北側)である。ほぼ全周しており、石室入り口部である南側は浅くなだらかに地表面・溝底とつながっている。これは浸食を受けた可能性も指摘できるが、本来あまり深いものではなかったものであろう。東側は1号墳の周溝と重なっているが切り合ひは不明である。周溝の埋土は自然浸食を受けた墳丘の盛り土が堆積したものであろう。

(2) 主体部

a. 主体部の形状・規模

残存状況

主体部は横穴式石室であった。残存状況は天井石は無く、石室内には多数の礫が存在した。4～5段の奥壁、側壁が残る。平面形態をとらえる上では良好といえよう。



第10図 2号墳墳丘実測図 (1:100)

形状

この横穴式石室は無袖式のものであり、わずかに脛の張る玄室にやや開く羨道がつながっていた。南側に開口し主軸はN-24°-Wである。

規模

規模は全長4.44m、玄室長2.99m、羨道長1.45mであった。幅は奥壁幅0.68m、奥壁より2.14m地点で最大幅0.91m、閉塞部分の奥壁側が0.90m、開口側は0.92m、石室開口部で1.01mであった。高さは奥壁部分で最も高く、敷石上面より測って0.80mであった。

床面

床面は5cm程度の円礫を敷いた上に20cm程の扁平な円礫が敷き詰めてあった。敷石の範囲は下面の円礫が奥壁より2.40m地点まで、上面の円礫が1.80m地点までであった。床面地山の標高は奥壁付近で141.500mである。

石材

石材は付近で採取できる石である。大半が自然石のまま用いているが、奥壁、側壁の一部に人為的に割られたものを用いている。奥壁は最大幅30~50cm程度、側壁は20~40cm程の石材である。

石積みの方法

石材の積み方は奥壁は広口横積みの5段であった。日地は縦方向には通っており、横方向については3段目まで通っていた。また奥壁の石の中にはお互いに接合するものがあった。東側の2段目、3段目である。持ち送りを意識しているのではないのであろうが上段ほど内側にせり出す。側壁は根石に広口横積みが見られるが、2段口以上は小口積みが主体である。日地は横方向は通っているが縦方向は通っていない。持ち送りは石室中央部でわずかに認められる。側壁と奥壁の接合部分には斜めに入る石が見られた。この石は石室内から確認するとわずかに見えるだけであるが、大部分が墳丘盛り土内に入り込んでいる。

閉塞状況

閉塞状況は奥壁より2.99m地点から0.95mの範囲で確認でき、高さは現状で0.54mであり、側壁などと同じ20~30cm程度の石を用いていた。閉塞石の積まれ方は整然としており、主軸に直交する東西方向3列を基本として積み上げている。玄室側と入り口側の列が明瞭であったのに対し中央の列は不明瞭である。

b. 掘り方

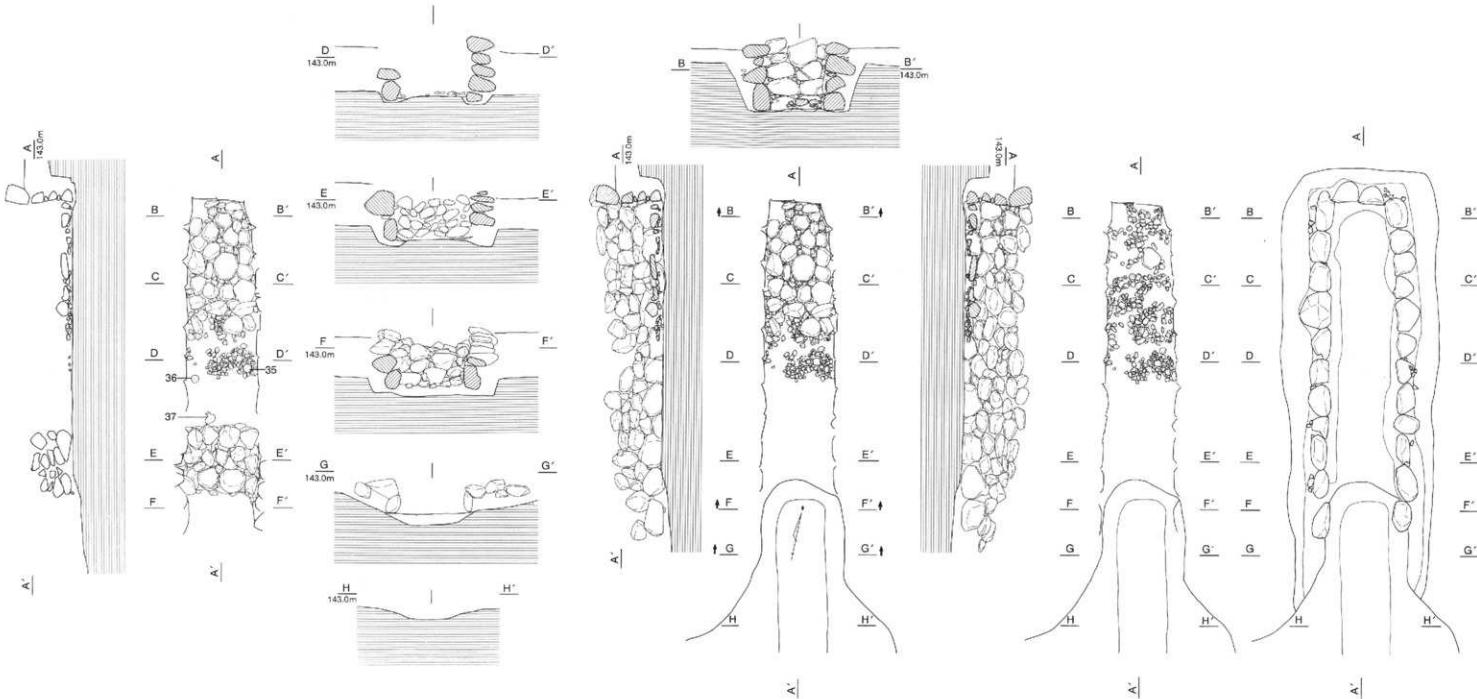
石室の掘方は行室よりわずかに大きい程度で、長さ5.5m、最大幅は玄室中央部で2.1mであった。また根石の据え付けのための棚方は溝状で深さ7~10cm程度であった。

c. 遺物出土状況

出土遺物は須恵器と鉄製品であった。須恵器は盤、坏身、平瓶が各1点出土した。いずれも玄室の閉塞石に近い所からの出土である。鉄製品は玄室埋土を鏟にかけたところ発見できた刀子片が1点である。(第18図)

(3) 古墳の築造順序

1号墳と同様の築造方法と考えられる。主体部分の掘削の後に、奥壁の最下段ついで東西側壁を積み裏込めを行ったのであろう。奥壁の裏込めは層を成しており、ほぼ奥壁の1段1段と対応するようであることから石が1段積み上がるごとに裏込めを行ったと考えられる。石積みが日地表面と同じ高さになった段階で石室の築造と並行して墳丘の盛り土を行ったと考えられる。石室が一段積み上がるとそれと同じくらいの高さまで盛り土をしたと考えられる。周溝の掘削時期は定かにできないが、周溝の土を用いて墳丘築造に使ったと考えられるならば墳丘盛り土の段階よりやや前であろう。



遺物出土状況及び附塞石除去前

閉塞石除去後(歿石上面)

歿石下面

根石と振り方

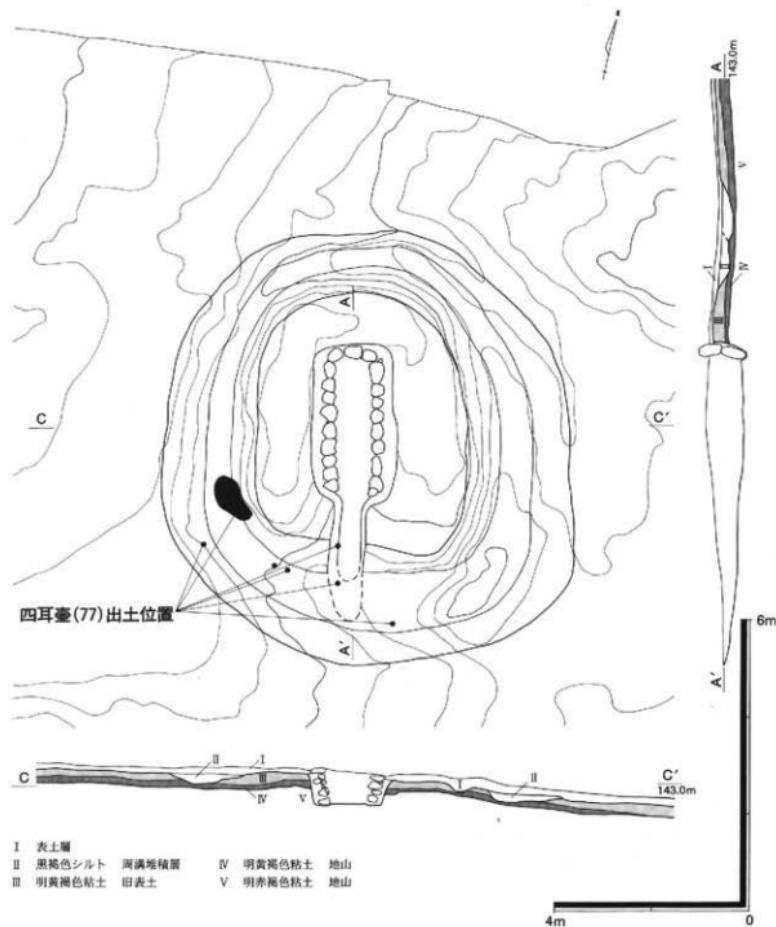
第11図 2号墳石室実測図 (1 : 50)

3 3号墳

(1) 墳丘と外部施設

a. 古墳の位置と調査前の状況

3号墳は尾根上平坦面の北東に位置し、南東に1号墳、南西に2号墳が存在する。調査前は雑木林であり、墳丘の存在すら確認できなかった。表土を除去したところ石室の石が現れ、古墳の存在が確認できた。



第12図 3号墳墳丘実測図 (1:100)

b. 墳丘形および規模

墳形は円墳である。規模は本文群中最小であり、南北5.2m、東西4.3mであり、南北にやや長いが、構築理念は円墳であったと考えられる。高さは現状では地表面とほとんどかわらず、石室入り口から見て0.9mである。

c. 墳丘盛り土

盛り土らしい盛り土は確認できない。現在表土となっている部分、20cm程が盛り上であろうか。

d. 周溝

周溝は表土除去後、石室の東西南北方向に設定したトレンチの断面で確認できた。この支群中最も明確な周溝であった。幅は最大幅2.5m（墳丘南側）、最小幅1.5m（墳丘北側）であり、深さは地表面から最深で0.3m（墳丘北側）である。ほぼ全周しているが、石室入り口部である南側はなだらかに地表面とつながっており浅い。

（2）主体部

a. 主体部の形状・規模

残存状況

主体部は横穴式石室であった。天井石は無いが残存状況は良好と言えよう、石室内には多数の櫛が存在した。

形状

この横穴式石室はわずかに胸が張る無袖式だが、玄室幅に対して奥壁が小さいので「船尾形」の平面形ともいえる。この玄室になだらかに地表面とつながる素堀の部分が続く¹¹。この部分に閉塞石が存在する。石室は南側に開口し主軸はN 14°-Wである。

規模

規模は全長2.92m、玄室長2.30m、素堀の閉塞部分は2.50mである。幅は奥壁幅0.41m、奥壁より1.35m地点で最大幅0.76m、閉塞部分の玄室側で0.70m、開口側で0.60m、素堀の部分は0.45mである。高さは奥壁部分で敷石上面より測って0.78m、地山からは0.87mである。

床面

床面は5cm～10cm程度の凹凸を敷きつめてあった。敷石の範囲は奥壁より2.24m地点までである。床面地山の標高は奥壁付近で142.66mであった。

石材

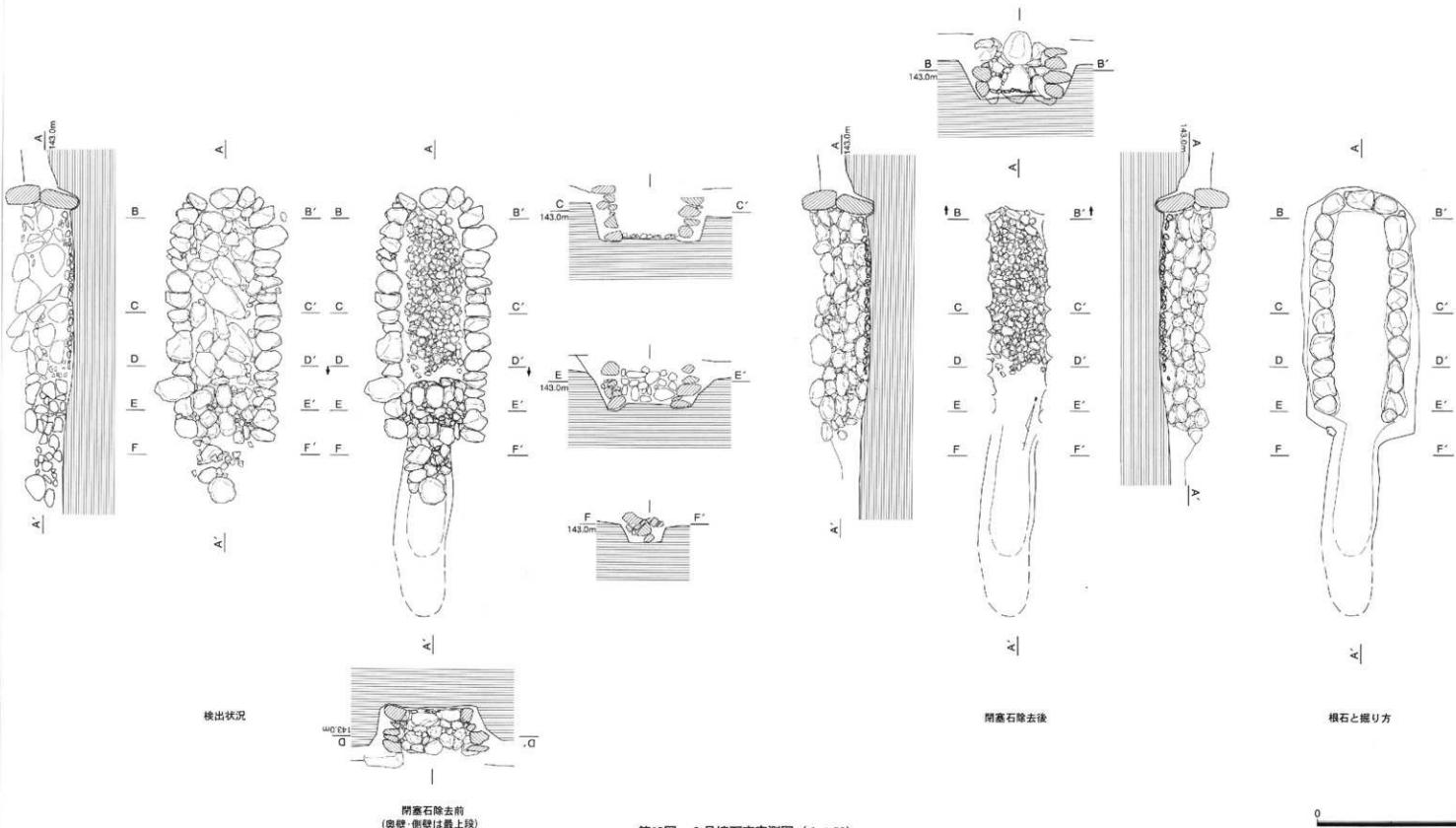
1・2号墳と同様の付近で採取可能な石を用いていた。1・2号墳と異なるのは割石を用いていないことである。奥壁は最大幅50cm程、側壁は20～45cm程の石材である。

石積みの方法

石室の石積みは奥壁については他の倍程度の2石を用いて広口縦積みし、2段からなっていた。側壁は小口積みが主体で広口横積みが混ざる。上段ほど小口積みが多い。目地は西側で一部乱れているものの横方向には通っているのが確認できたが、縱方向は不明瞭であった。奥壁の行は玄室幅より小さいので側壁の最も奥壁よりも奥壁・側壁の両者に対してやや斜めになっており、平面形はいわゆる「船尾形」になる。これは上段になるほど顕著である。奥壁付近と閉塞付近ではやや持ち送る。

閉塞状況

閉塞状況は奥壁より2.92m地点から1.70mの範囲で確認でき、高さは現状で0.62mであり、側壁等と同じ20cm程度からやや小さい10cm程度までの石を用いていた。閉塞石の積まれ方は奥壁寄りは整然としているが外部に至るにつれて難くなっていた。最も外側には50cm程度の他の石より明らかに大きいものを一石据えてあった。



第13図 3号填石室実測図 (1 : 50)

b. 掘り方

石室の堀方は石室よりわずかに大きい程度で、長さ3.65m、最大幅は中央付近で1.78mであった。また根石の掘え付けのための堀方は溝状で深さは側壁が5cm程度、奥壁が10cm程度であった。

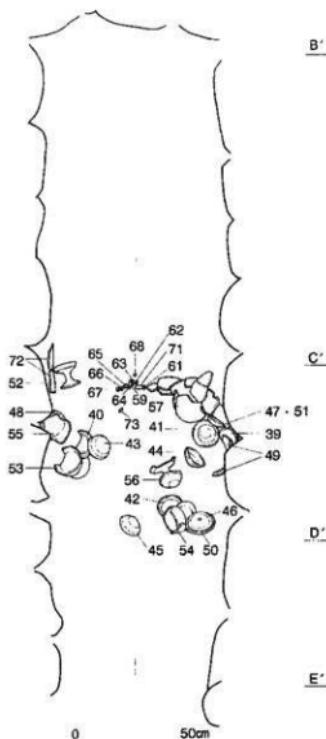
c. 遺物出土状況

玄室内は盜掘を受けなかったと考えられ、3基中最も豊富な副葬品が良好な状態で出土した。須恵器20点、刀子1点、耳環1点、勾玉2点、丸玉10点、簗玉1点が出土した。須恵器は壺、甌、高壺、壇、フラスコ形長頸瓶である。遺物はいずれも玄室中央部より閉塞部分に寄ったところで出土した。土器類はこの中で最も閉塞部分に近く、刀子は西側壁付近、耳環と玉類は中央付近であった。(第18、19、20図)

玄室外からも遺物は出土した。閉塞石部分においては閉塞石に混じって須恵器の壺1点と高壺2点が出土した。高壺は閉塞の最も外側の大きな石の下から出土した。周溝内からも須恵器の四耳壺片が出土した。

(3) 古墳の築造順序

1・2号墳と同様の築造方法と考えられる。主体部分の掘削の後に、奥壁の最下段ついで東西側壁を積み裏込めを行った。石積みが旧地表面と同じ高さになった段階で石室構築と墳丘の盛り土を並行して行ったと考えられる。周溝の掘削時期は明らかにできないが、周溝の土を用いて墳丘築造に使ったと考えられるならば、墳丘盛り土の段階よりやや前であろう。



第14図 3号墳遺物出土状況実測図 (1:20)

4 道状遺構

a. 位置と調査前の状況

道状遺構は調査区北側の中央、丘陵平坦面から東側の斜面にかけて存在する。調査前は周囲の地形から一段窪んだ様子が確認できた。(第6図)

b. 規模と形状

規模は最大で幅約1m、深さ約30cmである。谷側では深く幅も狭く明確であるが、丘陵頂上に近づくにつれて徐々に浅く、幅も広がって消えていく。

c. 出土遺物

丘陵頂部のこの溝状遺構が不明確になる付近から須恵器片が出土したが、この遺構に伴うものとは断言できない。須恵器片は短頸壺の口縁部と底部に復原できるものがあり、おそらく1個体になる。

(第20図)

5 集石造構

位置と調査前の状況

調査区の北東斜面で表土除去後に確認できた。調査前は雑木が茂り、わずかに数個の礫が地表面に出していただけであった。表土除去後、3cm~20cm程度の礫が検出でき、およそ2カ所の集中域がみられたので、西側のものを集石1、東側のものを集石2とした。

(1) 集石1

a. 規模と形状

東西、南北ともに1m50cm程の範囲であった。下部の方には東西・南北方向を意識した石の並びが見られる所があった。また水平面を作り出すことを意識したのか斜面の山側よりも谷側を高く積んであった。

b. 出土遺物

表土除去中に布目瓦片が1点出土したのみである。(第20図)

(2) 集石2

a. 規模と形状

集石1と同じ規模で、東西、南北ともに1m50cm程の範囲であった。形状も集石1と同様に東西・南北と水平面を意識した並びが見られる部分があった。

b. 出土遺物

出土遺物はなかった。

(第15図は浮いている石を除去した後に実測したので第16図と一致しないものがある)

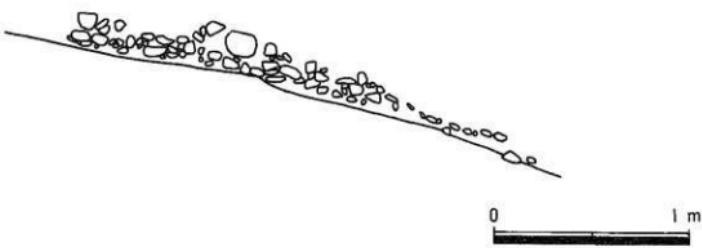
A

A'
141.0m

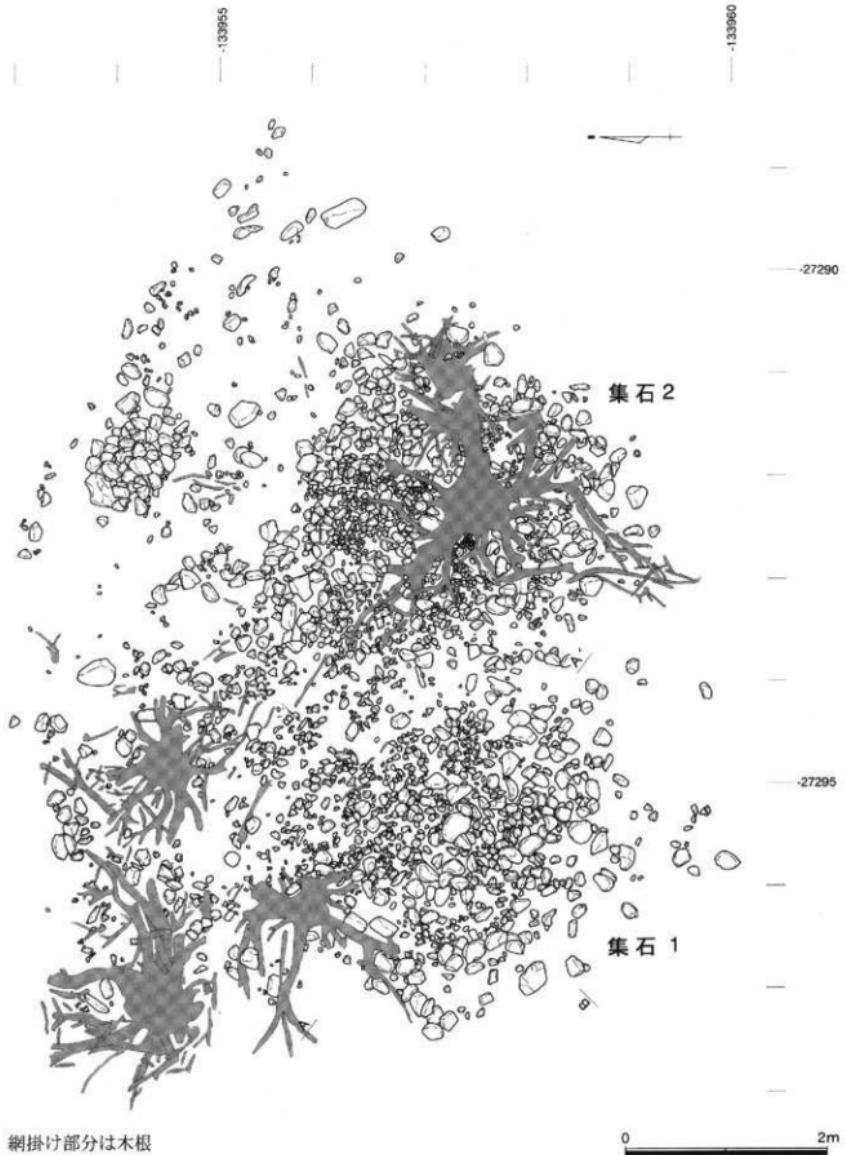


B

B'
141.0m



第15図 集石1断面図



第16図 集石遺構検出状況平面図

第2節 遺物

1 1号墳出土遺物

(1) 土器

須恵器が6点出土した。坏蓋(1、2)、坏身(3、4)、平瓶(5、6)である。6の体部が1/2程欠けている以外はいずれもほぼ完形に復原できた。1、2は坏蓋としたが、身として扱われた可能性も指摘できる。同様に3も蓋の可能性がある。現位置を留めているか断言はできないが、ここでは出土状態からそれぞれ坏身、坏蓋とした。共通点としていずれの坏身、坏蓋も調整は外面天井部、底部は同心円の回転ヘラ削り³²、外面体部から内面は横ナデをしている。1と2は内面口縁端部に1条の沈線を施す。5と6の平瓶は共に外面体部および頸部と内面は横ナデ調整を行っている点は共通する。異なるのは外面底部を5は回転ヘラ削り、6は回転ヘラ削りを施した後に横ナデで調整している点である。また6は5よりも肩の張りがはっきりしている。

(2) 金属製品

銀付足金物(11)、鞘口金具(10)、鞘尻金具(12)、鎧(9)等の刀装具、鉄鎌の破片(13~34)、刀子の破片(7、8)が確認できた。銀付足金物が金銅製品である以外はいずれも鉄製品である。

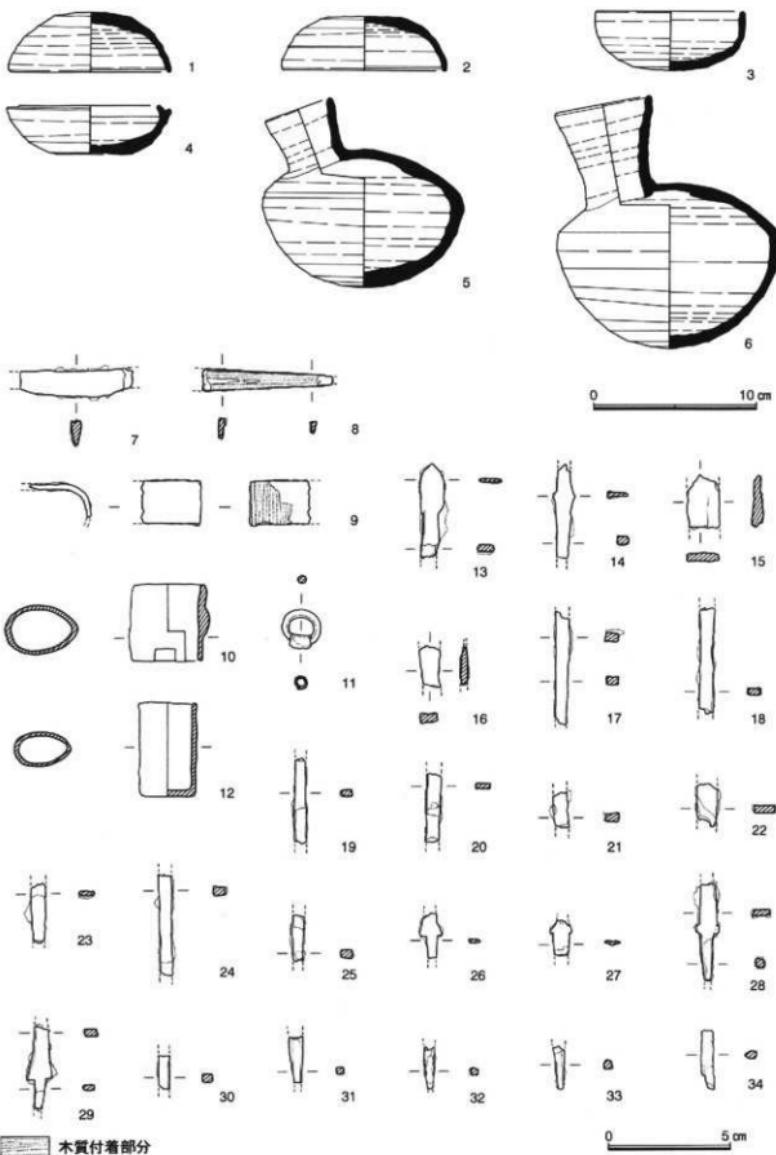
出土した刀装具が一本の太刀とその鞘であったかは断定できないが1本以上の大刀が副葬されていたことは確かである。10の鞘口金具と11の銀付足金物は、本来は10にある凹状の切り込みに11が接合していたと考えられる。10は断面上部の一部に金が付着していることが確認でき、これは資金具のものが付着したと考えられる(巻頭図版1)。この他に表面に布が付着していた跡が確認できた(巻頭図版2、3)。11の銀付足金物は銅芯金張りであるが全体の2/3程は金が剥がれていた。本来的には舌状の金具が付属しておりこれが10の凹部にはまるのであろう。刀子(7)と(8)は一個体であるかは不明である。刀子(8)と鎧(9)は木質が付着する。

鉄鎌³³はいずれも破片であり、全体がわかるものはなかった。ほとんどが長頭鎌と考えられるが腐食がひどく断言はできない。13~16、22が鎌身部と考えられる他は頸部と茎である。鎌身部については13がかろうじて形状がわかる程度であり、それ以外のものの形状は明確にはできない。13の鎌身部は端刃造りの長三角形、関は撫闇と考えられる。残存長3.8cm、3.2cmが鎌身部である。鎌身部の幅は1.1cm、厚さは0.2cmである。14、15、16、22は刃部は残存せずどのような型式の鎌であるか断定はできない。17~21、23、24は長頭鎌の頸部と考えられる。26、27は共に非常に薄いが棘状の関部と考えられる。28、29も共に関の部分と考えられる。28は棘状関、29は台形関または棘状関であろう。30~34は茎と考えられる。

2 2号墳出土遺物

(1) 土器

石室内から須恵器が3点出土した。坏身(35)、坏身(蓋)(36)、平瓶(37)である。35は坏蓋の可能性があるが、出土状態から判断して身とした。いずれの須恵器もほぼ完形であった。35、36共に調整は外面底部が回転ヘラ削り、外面体部から内面は横ナデである。35は口縁部内面に沈線を持つ。36は内面から外面体部にかけて自然釉が見られる。また口縁端部には他の須恵器(蓋であろうか)が施着した痕跡が見られる。37の平瓶は肩に2本、口縁部内面に1本の沈線を持つ。外面底部を同心円の回転ヘラ削りしている以外は横ナデで調整を行っている。



第17図 出土遺物実測図(1)

(2) 金属製品

石室内埋土を繰にかけたところ、鉄製品が1点確認できた(38)。刀子の頭を挟んだ刃部と茎と考えられる。一部に木質が付着している。

3 3号墳石室内出土遺物

(1) 上器

石室床面出土土器

須恵器が19点出土した。壺蓋5点(39~42、46)、壺身6点(43~45、48~50)、高壺4点(52~55)、瓶1点(56)、壺身1点(47)、壺蓋1点(51)、フラスコ形長頸瓶1点(57)である。

壺はいずれの蓋と身も口徑が10cm以下の大さきである。なお43~45をここでは壺身としてあつかったが壺蓋であった可能性はある。同様に39が壺身として扱われた可能性もある。1、2号墳では出土状態から壺の蓋と身を判断したがこの3号墳では反転して出土している乳頭状つまみを持つ蓋が多く、出土状況だけで蓋と身を区別するのは危険であろうから、対になっていると思われるものから判断して壺蓋、壺身とした。出土位置の近いもの同士から判断すると39と49、40と43、41と44、42と45、46と50がそれぞれ対と考えられる。46と50は共に返りを持つのであるが、これが対になって出土した。

壺蓋は返りを持たないもの(39)と返りと乳頭状つまみを持つもの(40~42、46)が出土した。39は5/6程度の残存状況、外面天井部が同心円の回転ヘラ削り、外面体部と内面が横ナデの調整である。外面天井部にはヘラ記号を持つ。40は外面天井部が同心円の回転ヘラ削り、外面体部から内面は横ナデで調整してある。41、42、46は完形品、外面天井部が回転ヘラ削り、外面体部から内面が横ナデの調整である。

壺身はいずれも完形品であり、受部を持たないもの(43~45)と持つもの(48~50)が出土した。43~45、48は外面底部が同心円の回転ヘラ削り、外面体部と内面が横ナデの調整である。49と50は外面底部が回転ヘラ削り、外面体部と内面が横ナデの調整である。43~45は外面底部と口縁部の境に稜を持つ。43は2段、44は1段、45は3段である。また口縁部内面にも43は1段の後を持ち、45は1条の沈線を持つ。この他48と49は外面底部にヘラ記号を有する。

壺も蓋(47)と身(51)が対になって出土した。蓋は乳頭状つまみを持ち、外面天井部が回転ヘラ削り、その他が横ナデで調整している。外面の天井部と口縁部の境には沈線による稜を持つ。身は外面底部が同心円のヘラ削り、その他が横ナデの調整である。

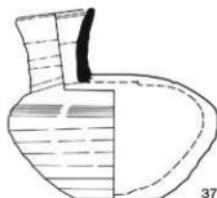
52~55が高壺である。55以外はほぼ完形である。52~54は無蓋の高壺であり、脚部には透かしを持たない。55もおそらく同様のものと考えられる。いずれも最終調整は横ナデである。52と53は壺の体部に2本の沈線を持つ。54の壺部の内外面には自然釉が付着する。55は焼成が悪く、残存状況は壺の体部と脚の上部のみであった。

瓶(56)は口縁部を一部欠くもののほぼ完形に復原できた。体部の穴は注ぎ口を張り付けた後、穿孔しているようである。調整は外面底部が同心円のヘラ削り、その他は横ナデである。体部の肩は明瞭で、2本の沈線を持つ。

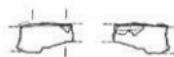
フラスコ形長頸瓶(57)は休部が一部欠けるもののほぼ完形に復原できた。調整は外面体部の片側がヘラ削りを行っている以外は横ナデである。外面体部のヘラ削りは1度行った後にもう一度削り直し調整をしているようである。

石室埋土出土土器

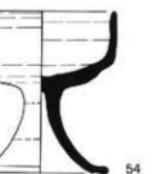
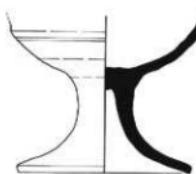
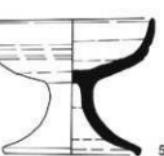
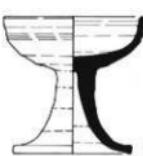
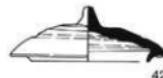
石室内落石を除去中に須恵器の壺(58)を1点確認した。口縁部が一部欠けるが、ほぼ完形であった。調整は外面底部が同心円の回転ヘラ削り、それ以外は横ナデである。



0 10 cm



0 5 cm



0 10 cm

木質付着部分

第18図 出土遺物実測図(2)

(2) 金属製品

刀子(72)と耳環(73)がそれぞれ1点石室床面より出土した。刀子は中央部できれいに接合できなかつたものの、金属部分はほぼ完形に残存する。茎の部分には木質が付着し、鏃もみられる。この鏃には突起状の膨らみが見られる。茎の部分は金属部分の断面形は長方形である。木質部分も含めると断面形は楕円形である。

耳環(73)は鋲地金張りの製品である。完形だがところどころ金が剥がれている。

(3) 石製品

勾玉2点(59、60)と丸玉10点(61~70)、棗玉1点(71)が出土した。59は淡黄褐色の瑪瑙製である。60は淡黄灰色である。片側がわずかに狭いことから片面から穿孔を行ったものと考えられる。丸玉はいずれも完形品である^註。いずれも白色であるが、63だけは褐色がかかっている。また63だけ他の丸玉より一回り大きい。棗玉は一部が欠損しているものの全体の形は把握できる。琥珀製であり、片側から穿孔をしたと考えられる。

4 3号墳閉塞部出土遺物

3号墳閉塞部からは須恵器が3点出土した。坏蓋1点(74)、高杯2点(75、76)である。いずれも閉塞石に混ざっており、破損はひどかった。坏蓋はほぼ完形に復原できた。外面天井部が回転ヘラ削り外面体部から内面は横ナデの調整であり、外面天井部にはヘラ記号を有する。高杯は共に焼成が不良であり、残存状況も悪く、調整は明確にはできない。75は残存状況は1/2程度であったが全体の形は把握できた。76は坏部の底部と脚部の上部が残るのみであった。脚部と坏部がきれいに分離しており、脚部の坏部との接合面には同心円状の切れ込みが入っていた。

5 3号墳周溝出土遺物

(1) 土器

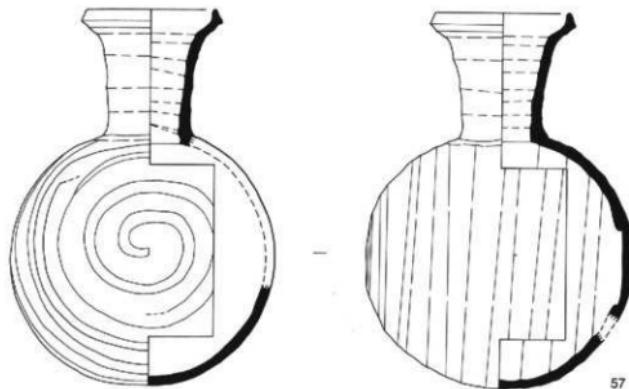
3号墳周溝からは須恵器の破片が十数点出土した。この破片は接合でき四耳壺(77)に復原できたが、底部の破片が見つからず復元できたのは肩から口縁までとなった。頸部は櫛書き波状紋を持つ。櫛書き波状紋は八本の櫛でかかれており、五段有する。上から3、4段目は不鮮明になる箇所があるがほぼ全周するようである。2段目の波状紋は上書きされた二本の沈線により下端部が消えている。1、5段目は不連続の波状紋である。体部は叩きで調整されており、内面には同心円文の叩き目がみえる。耳は三つ現存し2つまでが復元できた。復元できた耳の配置状況はほぼ90°になっており、さらに一つ存在したと考えられるので、四耳壺としたが三耳壺の可能性もある。

(2) 石器

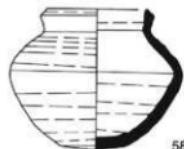
黒曜石片が2点(81、82)出土した。調査区内ではこれらの遺物に関係する遺構・遺物は確認されなかつたが、この付近に存在する可能性はある。もしくは共に3号墳の埋土中から発見されたので古墳築造前にはここにこの黒曜石に関連する遺構等が存在した可能性がある。

6 集石造構出土遺物

集石造構からは布目瓦片一点(78)が出土した。ただしこの遺構に直接関係があるものとは考えにくい。白灰色で裏側は格子状の叩き目が見られる。また表側の端部付近には幅1cmほどの何らかの工具を使って削り取ったような跡が長さ2.5cmほどに渡り見られた。



57



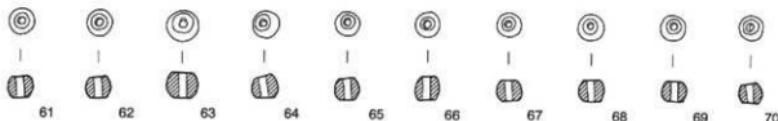
58

0 10 cm



59

60



61

62

63

64

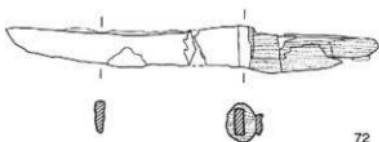
65

66

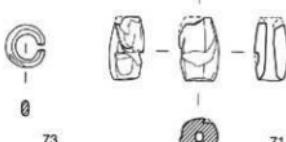
67

68

69 70



72



73

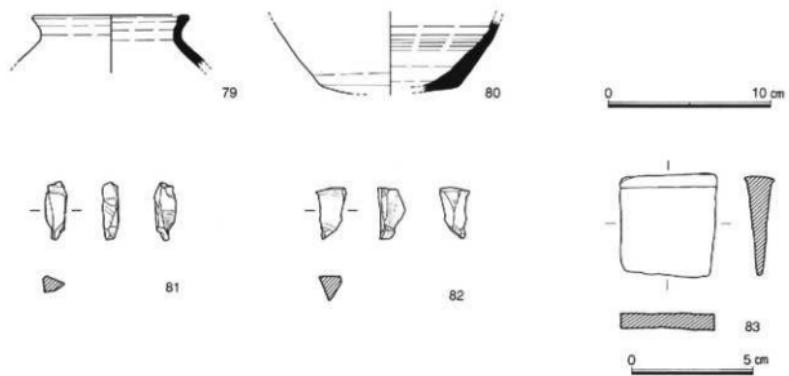
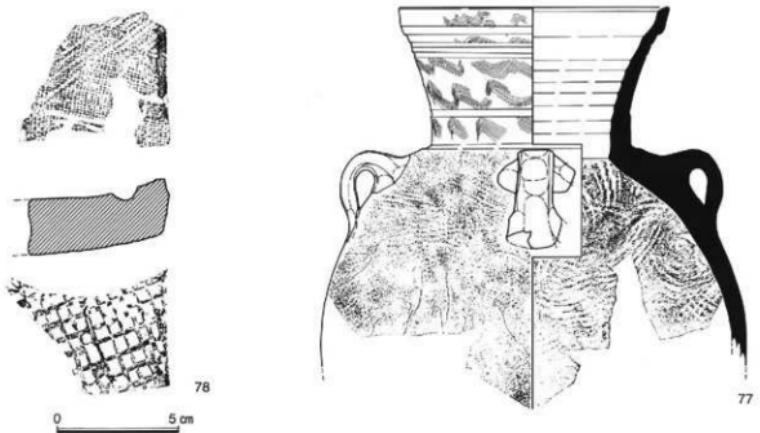
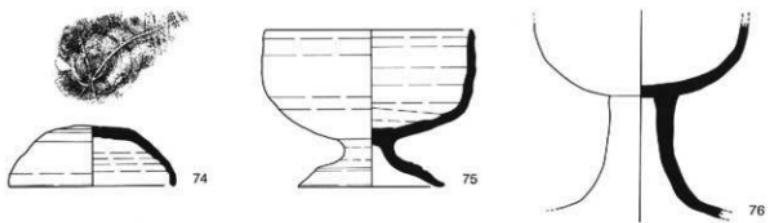
74

75

0 5 cm

木質付着部分

第19図 出土遺物実測図(3)



第20図 出土遺物実測図(4)

7 その他の出土遺物

表土除去中に調査区北西の平坦部、道状遺構が消える辺りで須恵器片と鉄製品が出土した。

(1) 土器

出土した須恵器片の中には接合できるものがあり、短頸亞の口縁部(79)と底部(80)が復原できた。この口縁部と底部は、一・個体になると考えられる。

(2) 鉄製品

鉄製品(83)は断面が三角形になる4.2cm×4cmの大きさの鉄片である。何らかのくさびであろうか。時期等は断言できないが、表土を除去中に確認できたのでかなり新しいものと思われる。

1号墳

番号	種別	器種	出土位置 層位	法量(cm)			残存	色調	備考
				口径	器高	最大径			
1	須恵器	壊蓋	石室床面	9.9	3.7		完形品	灰褐色 N4/	口縁端部内面に沈線による棱あり 壊身の可能性あり
2	須恵器	壊身	石室床面	10.0	3.4		完形品	青灰色 10BG6/1	口縁端部内面に沈線による棱あり 壊身の可能性あり
3	須恵器	壊身	石室床面	8.9	3.6		完形品	青黒色 10DG*1,7/1	壊身の可能性あり 内面は明オリ・ブ灰色(2.5GY7/1)
4	須恵器	壊身	石室床面	8.6	3.0	10.0	ほぼ完形品	青灰色 10BG6/1	受部を持つ
5	須恵器	平瓶	石室床面	4.1	11.8	12.4	ほぼ完形品	灰白色 N7/	
6	須恵器	平瓶	石室床面	5.8	15.7	14.0	胴部1/2欠損	灰白色 7.5Y7/1	

2号墳

番号	種別	器種	出土位置 層位	法量(cm)			残存	色調	備考
				口径	器高	最大径			
35	須恵器	壊身	石室床面	9.7	3.5		ほぼ完形品	青灰色 5B6/1	口縁端部外面に黒色部分あり 壊身の可能性あり
36	須恵器	壊身	右室床面	7.8	3.6	8.3	ほぼ完形品	白灰色 7.5Y7/1	内面底部と外側に縁部から本部に自然 剥離
37	須恵器	平瓶	石室床面	4.6	12.0	13.0	ほぼ完形品	白灰色 5Y7/2	口縁端部内面に1本の沈線 本部に2本

3号墳

番号	種別	器種	出土位置 層位	法量(cm)			残存	色調	備考
				口径	器高	最大径			
39	須恵器	壊蓋	右室床面	10.0	3.9		5/6残存	灰褐色 N5/0	ヘラ記号あり 内向は灰褐色(N6/0)
40	須恵器	壊蓋	石室床面	7.4	2.8	9.9	完形品	灰白色 5Y7/2	返りと乳頭状のつまみを持つ
41	須恵器	壊蓋	石室床面	7.7	3.5	10.4	ほぼ完形品	灰褐色 10Y5/1	返りと乳頭状のつまみを持つ 内面は灰褐色(7.5Y5/1)
42	須恵器	壊蓋	石室床面	7.2	3.4	9.3	ほぼ完形品	灰褐色 7.5Y6/1	返りと乳頭状のつまみを持つ 内面は灰褐色(5Y6/1)
43	須恵器	壊身	石室床面	9.2	3.9		完形品	灰褐色 N6/0	外側に24本の沈線による棱を持つ
44	須恵器	壊身	石室床面	9.2	3.5		完形品	灰白色 5Y7/1	口縁端部内面に1本の沈線による棱あり
45	須恵器	壊身	右室床面	8.8	3.5		完形品	灰色 N6/0	外側に3本の沈線による棱あり
46	須恵器	壊蓋	石室床面	7.5	2.7	9.3	ほぼ完形品	灰色 7.5Y5/1	口縁端部内面に1本の沈線による棱あり 内面はオリーブ灰褐色(7.5Y6/1)
47	須恵器	壊蓋	石室床面	8.0	3.8		ほぼ完形品	オリーブ灰褐色 5CY6/1	返りと乳頭状のつまみを持つ 50と対になり出土
48	須恵器	壊身	石室床面	8.5	3.0	10.4	完形品	明オリーブ灰褐色 2.5GY7/1	受部を持つ ヘラ記号あり 口縁部外側に黒色部分あり

49	須恵器	环身	石室床面	8.5	3.4	10.6	ほぼ完形品	灰色 N6/0	受部を持つ ヘラ記号あり
50	須恵器	环身	石室床面	8.6	3.5	10.3	完形品	灰白色 705Y 7/1	受部を持つ 46と対になり出土
51	須恵器	増身	石室床面	6.5	3.3	9.0	ほぼ完形品	青灰色 5B6/1	47と対になり出土
52	須恵器	高坏	石室床面	8.5	8.5	7.7	ほぼ完形品	灰白色 5Y7/1	环部分に1本の沈線あり 脚径5.3cm
53	須恵器	高坏	石室床面	10.3	8.5	8.3	ほぼ完形品	灰色 7.5Y6/1	焼き跡が見られる 脚径4.5cm
54	須恵器	高坏	石室床面	8.9	10.1	8.1	ほぼ完形品	浅黄橙色 10YR8/3	环部分の外表面に自然歯あり 脚径4.3cm
55	須恵器	高坏	石室床面		9.0	15.0	体部と脚部	淡黄色 2.5Y8/3	焼成が不良、残存状況は悪い 脚径10.4cm 脚径3.3cm
56	須恵器	馬	石室床面	10.2	11.1	10.4	ほぼ完形品	灰白色 2.5Y7/1	体部に2本の沈線あり
57	須恵器	長瓶瓶	石室床面	7.9	23.0	16.4	ほぼ完形品	灰白色 2.5Y7/1	プラスコ形の長瓶瓶
58	須恵器	埴	石室埋土中	6.2	8.7	10.7	ほぼ完形品	灰オリーブ色 3Y6/1	
74	須恵器	环蓋	閉塞部分	10.0	3.8		ほぼ完形品	灰色 N5/0	ヘラ記号あり
75	須恵器	高坏	閉塞部分	12.8	9.8	8.8	約1/2	灰色 10Y6/1	焼成が不良、残存状況は悪い 脚径3.1cm
76	須恵器	高坏	閉塞部分		7.3	12.6	口縁部と脚 端部を欠く	灰白色 2.5Y8/2	焼成が不良、残存状況は悪い 脚径4.0cm
77	須恵器	西耳茎	周溝	16.3		26.1	底部を欠く	灰白色 7.5Y7/1	三耳茎の可能性あり 外向に自然歯 底部に焼き波状紋あり

第3表 出土土器観察表

東高坏は底径を最大径の欄に記入。(55を除く)

	墳丘				石室					
	墳形	南北径	東西径	高さ	全長	玄室長	奥壁幅	最大幅	奥壁高	残存高
1号墳	円墳	10.5m	9.0m	1.6m	7.47m	4.4m	0.98m	1.17m	1.28m	1.49m
2号墳	円墳	6.0m	6.0m	1.1m	4.44m	2.99m	0.68m	0.91m	0.8m	0.8m
3号墳	円墳	5.2m	4.3m	0.9m	2.92m	2.3m	0.41m	0.76m	0.78m	0.78m

第4表 古墳計測表

註

- 「前溝」(西駿考古学研究会1968等)、「素堀狭道」(浜松市教育委員会1988)に相当する。
- 中心部と外周部に2回に分けヘラ削りを行っている。単に「回転ヘラ削り」と記してあるのは「渦巻き状」の回転ヘラ削りであり「同心円のヘラ削り」と「渦巻き状のヘラ削り」を区別した。
- 鉄器の分類は杉山1988を参照とした。ただし「茎」については新納1991の指摘があり「基部」ではなく「茎」を用いた。
- 使用石材は肉眼観察だが高陵石との指摘を受けた。勾玉60も同様の石材である。

参考文献

- 後藤建一 1989 「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」『静岡県の窯業遺跡』静岡県教育委員会
 杉山秀広 1988 「古墳時代の鐵鎌について」『樋原考古学研究所論集』第8 吉川弘文館
 新納泉 1991 「副葬品の種類と編年 武器」「古墳時代の研究』8 雄山閣出版
 西駿考古学研究会 1968 『瀬戸古墳群』
 浜松市教育委員会 1988 『半田山古墳群(IV中支群・浜松医科大学内)』

第IV章　まとめ

今回の調査地内では3基の古墳と集石遺構、道状遺構が確認できた。調査の成果について整理し、古墳とその他の遺構、水掛渡古墳群A群・B群とC群の比較に分けてまとめを行う。

1 古墳

水掛渡古墳群C群は、牧ノ原台地東端の標高約140mの丘陵上平坦部に存在する古墳群である。以前(1964年)に調査された水掛渡古墳群A群・B群(以後、A群・B群)を含めた周囲の古墳群よりも一段高い丘陵上に位置する。今回の調査で得られた知見を示す。

- ①水掛渡古墳群C群は3基の古墳からなり、いずれも円墳で周溝を有し内部主体は南側に開口する横穴式石室である。
- ②いずれも石室はある程度地山を掘り込んで築造されている。墳丘は盛り土が行われているが、現状ではあまり高いものではない。
- ③石室形態は1号墳と2号墳は形態が近いが、3号墳だけ異なる。1・2号墳は無袖型、玄室はわずかに胴の張る長方形である。1号墳のみ閉塞石入り口側で幅をやや狭め玄門を意識しているようであるがはっきりとした袖を有しているのではない。3号墳は1・2号墳と同じ無袖型の石室だが奥が窄まる「船尾形」の平面であり、閉塞部分の側壁は石組みではなく素掘りである。
- ④使用石材は1号墳・2号墳では自然石に一部割石が混ざり、3号墳では自然石のみを用いていた。
- ⑤玄室床面はいずれも敷石が施されていたが、その様子は各古墳とも異なる。1号墳と2号墳は敷石が2重に施されている。それが全面ではなく閉塞石との間に施さない部分を持ち、下の敷石の方が上の敷石よりも範囲が広く、下の敷石に用いられている礫は5cm~10cm程の大きさと言う点では同じである。異なるのは上の敷石に用いられている石材が1号墳は扁平な割石であるのに対し、2号墳は扁平な円礫であると言うことである。3号墳は1面しか敷石が施されていないが、閉塞部分まで敷き詰められている。用いられている石材は5~10cm程の礫である。この2面ある敷石であるが追葬により2面あるのではなく、最初から2面であったようである²¹⁾。

⑥閉塞の状態は1号墳・2号墳は近いものであるが3号墳のみ異なっている。1号墳・2号墳の閉塞石は整然と積まれていた。3号墳も玄室側は整然としているが開口側は雑然としている。

- ⑦いずれの古墳も天井石が架構されている様子は確認できなかったが、石室内には多数の礫が存在した。多くが側壁に用いられている石材とほぼ同じ大きさであるが、中には側壁等に用いられている礫より大きな礫が数個、石室主軸にそった中央部に存在した²²⁾。この石を含めた天井石の存在の有無であるが、この問題はA群、B群の調査(以下、前回の調査と記す)でも問題となっており、簡潔に記すと(i)当初から欠いていた。(ii)側壁を持ち送って構築した。(iii)木材を掛け渡しその上に礫を置き天井とした。(iv)礫を石室内に充満して天井を架構したかのように見せていた。以上の四点があげられており、(iv)が当てはまるのだろうと推測されていた。

今回の調査ではこれらの礫は天井石を意識していると考えられ(i)ではないだろう。(ii)、(iii)は可能性としてはあり得る。(ii)と(iii)の場合、石室内に存在した礫は天井石や側壁の上部が崩落したと考えられ墳丘は現状より高いものになる。問題としては、(ii)は現状の持ち送りや使用石材から考えるとやや難があり²³⁾、(iii)は木材の痕跡が示されなければ断定はできない。前回の調査で想定された(iv)であ

るならば、墳丘も現状の高さと大きく変わらないのであろう。C群は追葬は行われていないと考えられるが、この場合追葬はかなり困難になり横穴式石室でこのような方法が採られること自体、追葬は意識されてないとも考えられる。ただし(iv)も問題点はある。床面東側の敷石の状態から1号墳は盗掘されていると考えられるのであるが、調査前にも石室内は蹠が多くあった。石室内を充満していた蹠を盗掘の際抜き取る必要がある。この抜き取った石材を副葬品を持ち出した後に戻すような行為はするのであろうか。また地域的な墓制との解釈も可能ではあるが、類例が無いことも問題点としてあげられる。以上のことから今回の調査では(ii)あるいは(iii)か(iv)のいずれかである可能性が指摘できるが、いずれの説も積極的に肯定するには決定的な確証を欠く²³⁾。

- ⑧古墳の築造時期は出土遺物、須恵器から判断すると各古墳とも7世紀中頃かや遅れる時期であろう²⁴⁾。また各古墳間の時期差は遺物から判断するのは難しい²⁵⁾。また遺物から判断すると追葬は行われていないようである。
- ⑨出土遺物はいずれの古墳でも須恵器、刀子が出土した。この他1号墳では大刀の鞘、鞘金具、鉄鎌等の武器が出土した。3号墳では勾玉、丸玉、棗形、耳環といった装身具が出土した。玉類は並んで出土した。耳環も含めてこれらが埋葬當時身につけており、元位置を留めているならば南向きの埋葬頭位であろうか。この他の古墳に関係する遺物として3号墳周溝から須恵器の四耳壺片が出土した。この四耳壺は墓前祭祀との関係が考えられる。須恵器で問題になるのは坏身とした43~45である。これらはその逆である可能性がある。生産地ではほぼ同じ形状の坏身と坏蓋が並行して存在するのであるが²⁶⁾、この消費地の実体としては身として機能していたと考えた。そしてこれらには返りと乳頭状つまみの付く蓋が対になっていた。ただしこの乳頭状つまみが付く蓋が必ずしも受部を持たない坏身の蓋としてのみ使用されていたわけではない。それが46と50である。共に受部、返りを持つ坏身、坏蓋であり、それぞれ返り、受部を持たないものとの組み合せが想定されるものであるが、この二つが組み合わさせて出土した。入手できた物の実体に合わせて使川したのだろう。須恵器の生産地については主に湖西であるが、湖西産以外のものも含まれるようである。1号墳から出土した鞘口金具であるが銀坏足金物の存在から「佩川」の大刀の鞘であることがわかる。銀付足金物は金銅製、鞘口金具は鉄製だが、それに付着する資金具は金銅製である。県下で銀坏足金物を有する大刀を出土している古墳は、森町院内乙古墳、静岡市牧ヶ谷2号墳、長泉町土狩長塚古墳等があげられる。いずれも横穴式石室を持つ古墳である。

2 その他の遺構

集石遺構は2カ所に集中域が分けられそれが東西方向と水平面を作り出すことを意識している部分が確認できた。検出時は中世墓の可能性が考えられ抜け跡や骨片、下部に何らかの遺構があることを期待していたが何も確認できなかった。遺構の性格として考えられるのは①古墳築造時に地山より大量に出た蹠の廻糞場所。②上部に何らかの簡素な上屋（祠のようなもの）がありその基底部等があげられる。集石1からはこの遺構唯一の遺物である布目瓦片が出土しているが、遺構の性格そのものを示すものとは考えにくい。ただしこの瓦片が集石築造時の時に紛れたならば①の可能性は低い。今回の調査で得られた資料だけではこれ以上の断定はできないので、この2点を挙げるに留めておく。

道状遺構は出土遺物もなく時期を明らかにすることもできない。3号墳周溝との切り合いは断面観察では確認できなかったが、周溝による窪みを利用して古墳時代以降にできたものと考えられる。谷側よりも頂上付近の方が深いのは漫食によるものというよりも、元来深いものであったのであろう。古墳の墓道との可能性も指摘されたが古墳から続く道も確認できなかったので墓道の可能性は低い。また集石遺構との関連も特に見られなかった。簡からこの丘陵頂部に至る道であろう。

3 A群・B群とC群の比較

A群・B群の調査の成果との相違点を述べる。立地は周囲の古墳群を合わせて考えてもこのC群だけ一段高い丘陵上にある点が異なる。群構成ではA群、B群は2～3基の単位群が集まり小支群を成しているのだが、C群は3基からなる単位群がそのまま小支群となっているとみなしてよいだろう。墳丘は前回の調査では封土を持つものはいずれも円墳であり、今回の調査でも全てが円墳であった。異なるのは周溝の存在である。内部主体は共に横穴式石室であった。天井石が架構された状態でない点や立柱石による玄室と狭道の区別を行わない点、床に敷石を施す点は共通する点である。また石室の平面形状も若干の違いはあるが、大きく変わるものではない¹⁹。異なるのは閉塞の状態である。前回の調査では2重閉塞が確認されたのに対して今回の調査では存在しないことが判明した。また今回の調査では閉塞石が整然と壁状に積まれていることが判明した。しかし前回調査されたもの全てが2重閉塞を持っていたわけでもなく、閉塞石が整然と積まれていたことが読みとれるものも存在した²⁰。敷石はどの石室にも施される点では共通するが、今回は追葬とは関係なく2重に施すものがあった²¹。石室の主軸方位はC群はB群よりもA群に近い。B群の方が西に偏っている。規模は墳丘、石室共にC群1号墳はA群・B群を含めて最も大きい部類になり、3号墳は最も小さな古墳の部類である。またC群に比べA群の方がより狭長な石室と言った感じを受ける。

出土遺物について須恵器は、時期的にはC群の須恵器はA群のものに近いのでほぼ同時期としてよいだろう。ただしA群の方が前後の時期差があるようだ。大刀は今回の調査ではその存在を考えられる鉢や精金具が出土しているが、前回の調査では刀身も出土している。前回の調査でも精金具が出土したが、環坏足金物を伴うものはない。装身具類は、前回の調査では今回と同様の勾玉、糸玉、丸玉の他に管玉、小玉、切子玉が出土している。材質もガラス製や碧玉製、水晶製のものが含まれるなど違いがある。耳環はともに出土しているが今回のものの方が小振りである。

以上、A群・B群とC群を比較してみると概ね同じであるがそれでもわずかな違いが見られた。以下それをまとめた。水掛渡古墳群はB群の築造が6世紀後半に行われ7世紀前半からA群の築造が開始された。C群はA群と同時に造営されたと考えられるが、A群の方が時間幅があるようである。立地や群構成はやや異なる。古墳の外部施設、内部施設からはA群・B群とC群は大きな違いはないが、B群よりもA群にC群は近い。ただし周溝の有無や閉塞の状態、床面の状態等に違いが見られ全く同質の古墳とは言いきれない。副葬品は大きな相違はないもののC群の方がやや劣った感じがする。A群は追葬が報告されているがC群では認められなかった。これらのわずかな違いは被葬者の違いを反映しているのであろう。しかし古墳や副葬品の規模や質の違いがわずかであることから被葬者の社会的な地位は大きく変わらないと考えられる。ただしC群は古墳の立地状況、追葬がないことや支群を構成する単位群が少ないことからA群よりは造営に対して制約があるようである。

最後に、この付近では同時期の集落は未発見であるが、湯日川を隔てたすぐ北の台地は「初倉跡」推定地であり、その時期の集落も確認されている。また岡田原台地上には古代寺院である「竹林寺」が存在し、古墳時代後期から窯業の開始が確認されるなど古墳時代後期から古代にかけて多くの遺跡が存在し、重要なものも含まれる。今後の調査によって当時の社会を総合的に復元でき被葬者像にせめることを期待したい。

文末ではあるが現地調査、報告書作成にあたって、下記の方々、機関より有益な御教示・御協力を賜った。記して感謝の意を表す。(五十音順、敬称略)

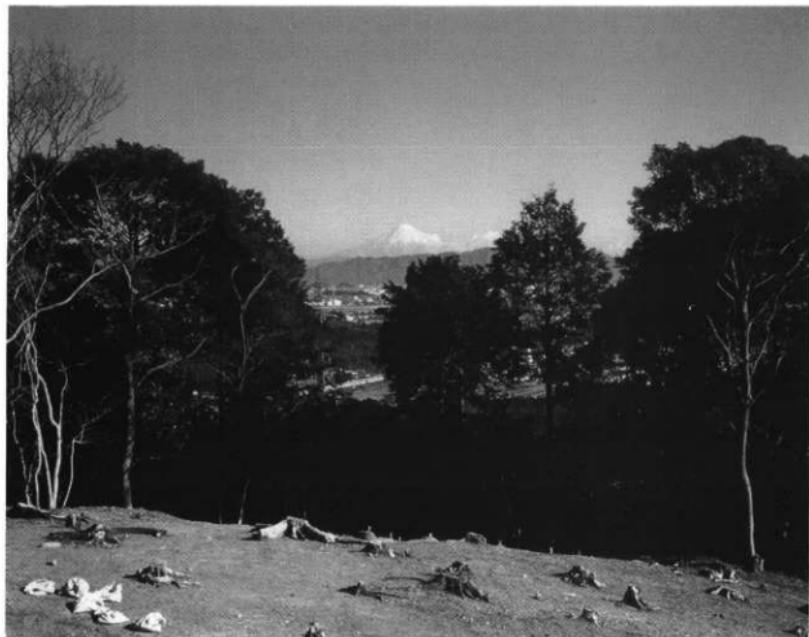
市原壽文 坂巻隆一 篠ヶ谷路入 柴田稔 清谷昌彦 鳴野雄康 稲沢誠 田中学 植原靖弘 西野歩
島田市教育委員会

註

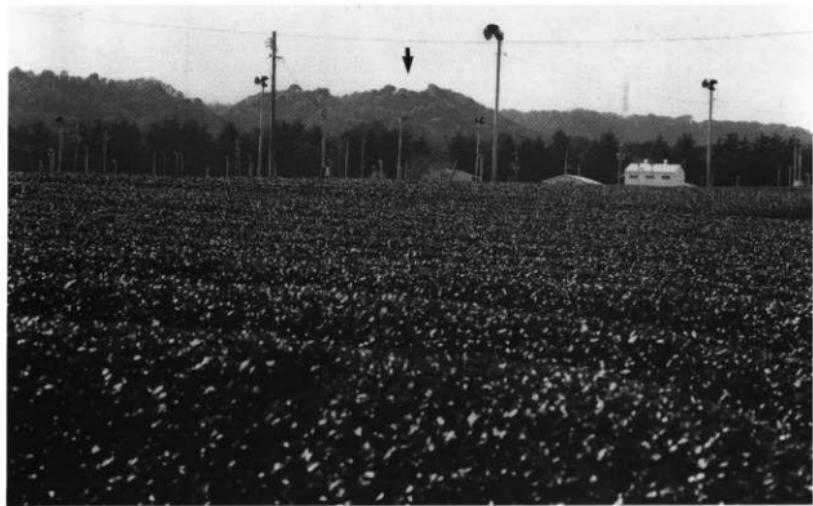
- 1 追葬に伴い副葬品をかたづけたとも理解できるが、敷石下層と上層の間には遺物はなかった。敷石間には堆積層もなく上層の石と下層の石は密接していたので築造当初から2面存在したと判断した。
- 2 側壁等の石材は最大幅30~50cm程、天井石と考えられる石材は最大幅55~70cm程である。石室内に存在した石は1号墳で前者が約250個、後者が8個、2号墳は前者が約30個、後者が6個、3号墳は前者が約80個、後者が5個である。
- 3 現状では持ち送りはわずかであり、このまま持ち送るならば天井はかなり高い物になる。また現状の最上段より上から急激に持ち送りを強め、そのために強度が不足し崩壊したとも考えられるが近辺にそのような途中から持ち送りを強め天井とする架構状況を示す類例はない。
- 4 増58は石室埋土中の疊の隙間より出土したが(iv)ならば礫を詰めている最中に混ぜられた。それ以外ならば石室の天井が崩落した時に紛れ込んだと考えられる。
- 5 豊岡村1993の中で柴田は「最大径が最小になる蓋坏の一群众は・・・田辺編年のTK46型式付近に併行すると考えるのが妥当である」としており、当古墳群出土の坏類はこの最大径が最も小さくなる一群と考えられるためここではそれを参照とした。後藤1989では第III期第1小期、川江1979では第IV期前半に相当すると考えられる。
- 6 鈴木1988では浜松市半田山古墳群A小支群、同IVC、D小支群を「後出する古墳は、原則として最初に作られた古墳よりも前方に作られず、順次後方に作られる傾向がある。」としており、これが水掛渡古墳群にもあてはまるならば、1・2号墳より3号墳が後に造られたと考えられる。
- 7 後藤1989
- 8 A群・B群は奥壁の状態が3号墳に近いものが多いため平面形が「船尾形」になるものが多い。A-1、4、6~13、15である。奥壁が1・2号墳と同様なのはA-2、3号墳。平面形は長方形である。この他のものはやや脇が張る長方形である。また1・2号墳と同様に「ハ」の字型に開口するものはA-1、3、5、7である。
- 9 閉塞石が整然と積まれている様子が読みとれるのはA-7とA-14、17の第1閉塞である。A-15、B-3もその可能性があり、範囲は広いがA-11も整然と積まれていたと報告されている。
- 10 前回の調査でも2重のものがある。A-2であり、A-1もその可能性がある。A-7は2面と報告されている。

参考文献

- 川江秀孝 1979 「静岡県下の須恵器について」『静岡県考古学会シンポジウム』2
須恵器-古代陶質土器-の編年 静岡県考古学会
- 後藤健一 1989 「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」『静岡県の窯業遺跡 本文編』
静岡県教育委員会
- 鈴木敏則 1988 「遠江における群集墳の終末について」『静岡県考古学研究』21
静岡県考古学会
- 田辺昭二 1981 「須恵器大成」角川書店
- 松崎元樹 1985 「古墳出土鐵坏足金物を施す大刀について」『東京考古』第3号
- 古代の土器研究会 1998 『古代の土器』5-2 7世紀の上器(近畿西部編)
- 静岡県 1992 『静岡県史』資料編3 考古三
- 静岡県文化財保存協会 1965 『島田市水掛渡古墳群発掘調査報告書』
- 静岡市教育委員会 1983 『駿河・牧ヶ谷古墳』
- 豊岡村教育委員会 1993 『新平山遺跡』(II)



1. 調査地点から北東を望む



2. 岡田原台地から見た調査地点

図版 2



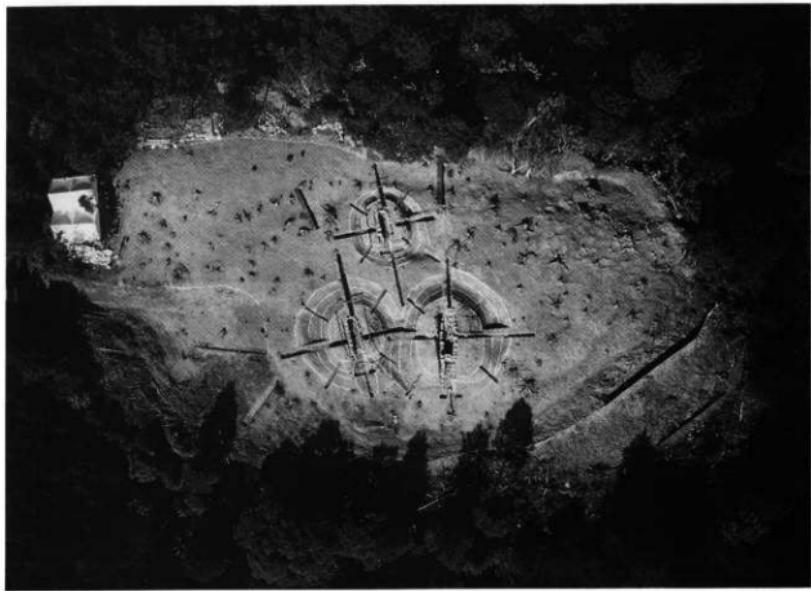
1. 遺跡全景（西より）



2. 遺跡全景（東より）



1. 遺跡全景



2. 遺跡全景（上空より）

図版 4



水埜溝古墳群C群全景



1. 調査前の状況（北より）



2. 検出状況



3. 石室全景（閉塞石除去前）

1号墳

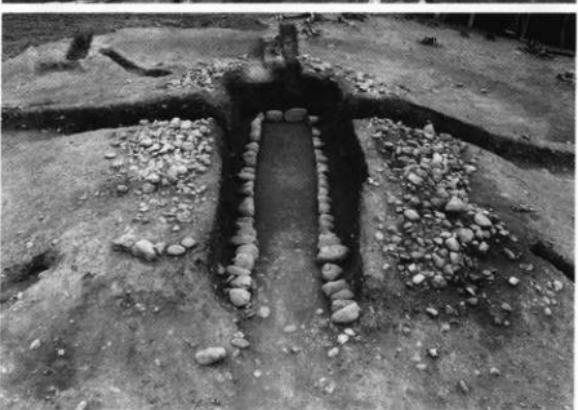
図版 6



1. 石室全景（閉塞石最下段）



2. 石室全景（敷石上層除去後）



3. 石室根石と墳丘内疊層検出状況

1号墳



1. 石室奥壁



2. 奥壁と東側壁（南西より）



3. 閉塞石



4. 閉塞石（北より）



5. 遺物出土状況（北より）



6. 石室掘り方

1号墳

図版 8



1. 奥壁付近の東側壁
(西より)



2. 墓丘西トレンチ
北壁土層断面



3. 墓丘東トレンチ
北壁土層断面



4. 墓丘北トレンチ
西壁周溝土層断面

1号墳



1. 掘出状況



2. 石室全景（閉塞石除去前）



3. 石室全景（閉塞石除去後）

2号墳

図版10



1. 石室全景（敷石上層除去後）



2. 石室模石



3. 石室掘り方

2号墳



1. 石室西側壁（南東より）



2. 石室東側壁（南西より）



3. 石室奥壁



4. 遺物出土状況（北より）

2号墳

図版12



1. 閉塞石



2. 閉塞石（北より）



3. 閉塞石（上より）

2号墳



1. 石室全景（閉塞石除去前）



2. 石室全景（閉塞石除去後）

3号墳

図版14



1. 検出状況



2. 石室根石



3. 石室掘り方

3号墳



1. 閉塞石（北より）



2. 閉塞部分遺物出土状況

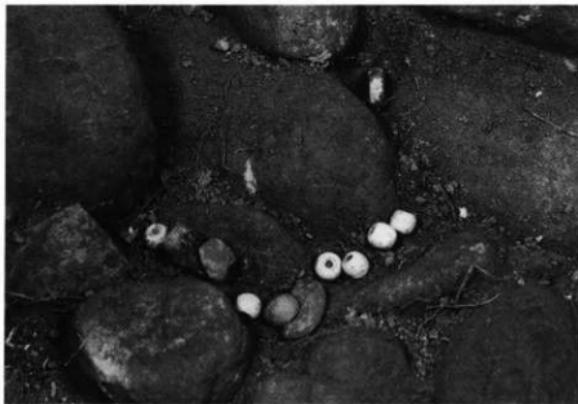


3. 墳丘東トレンチ北壁
周溝土層断面

3号墳



遺物出土状況（北より）



1. 玉類・耳環出土状況
(北より)



2. 刀子・高杯出土状況
(東より)



3. 杯・匙出土状況
(西より)

3号墳

図版18



1. 集石1検出状況（東より）

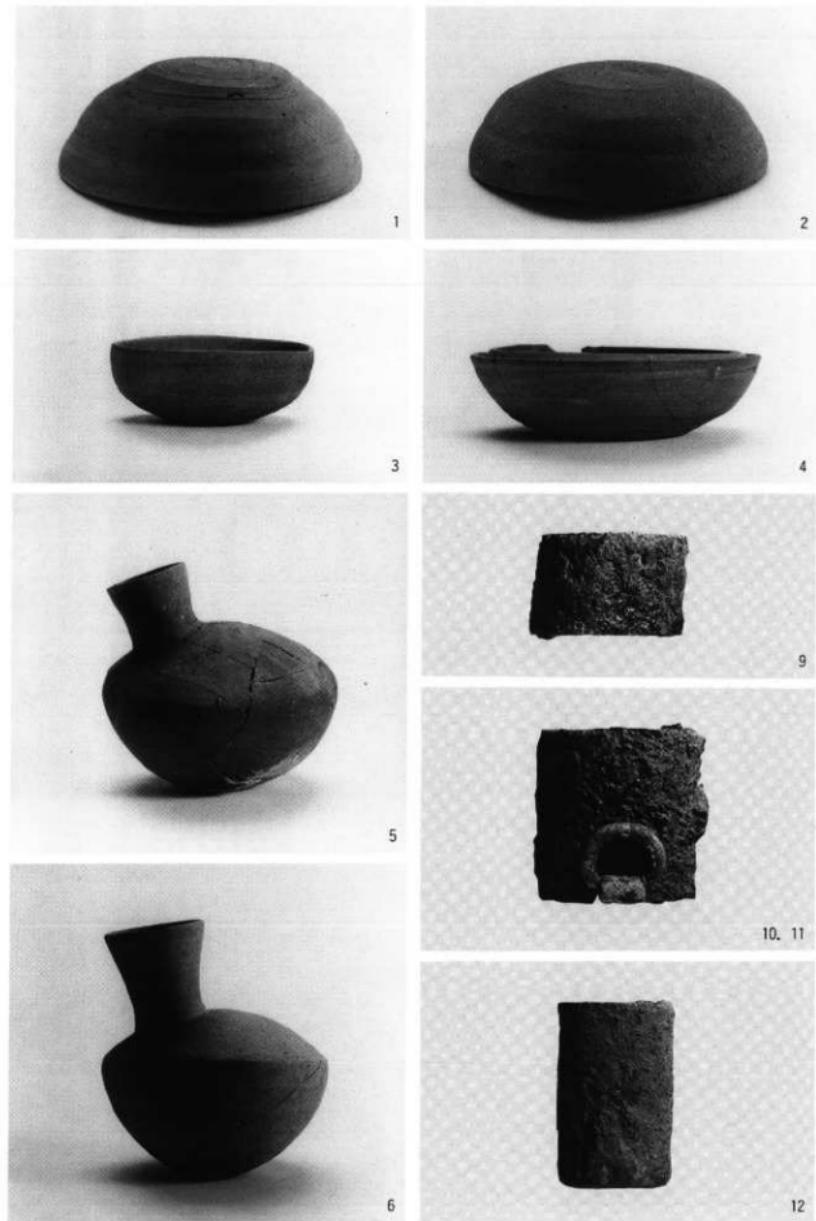


2. 集石2検出状況（東より）

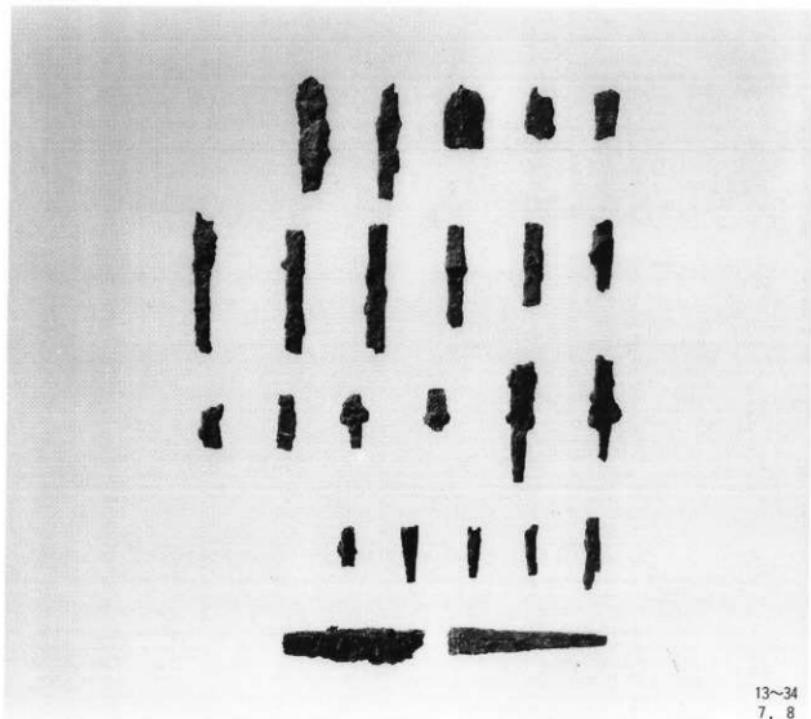


3. 集石完掘状況

集石遺構



1号墳出土遺物



35



37



36

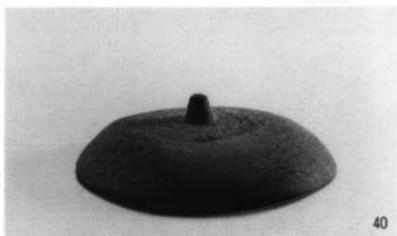


38

1号墳（7, 8, 13~34）、2号墳（35~38）出土遺物



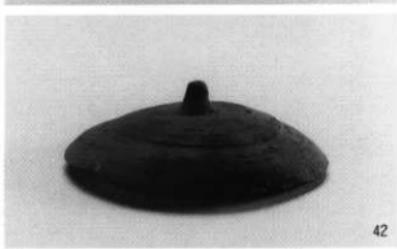
39



40



41



42



43



44



45



46



49



50. 46

3号墳出土遺物



47. 51



52



53



54



55



56



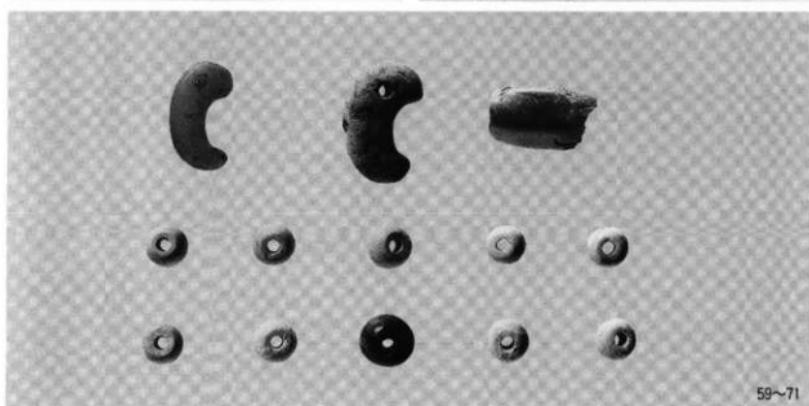
57



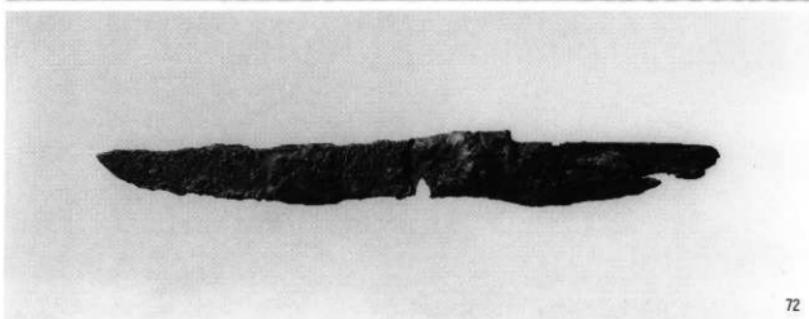
58



73



59~71

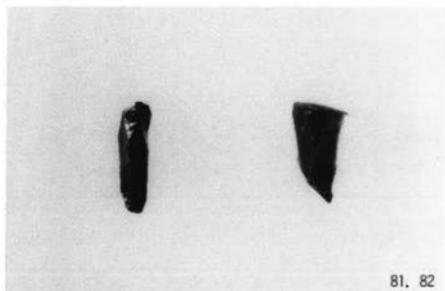


72

3号墳出土遺物



77



81, 82

3号墳周溝出土遺物



75



76



74



79



83



80



78



78

3号墳閉塞部、集石、その他出土遺物
(74、75、76) (78) (79、80、83)

報告書抄録

ふりがな	みずかけどこふんぐん しーぐん (しづおかくこうしーちてん)							
書名	水掛渡古墳群C群(静岡空港C地区)							
副書名	平成9年度静岡空港単独整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書							
シリーズ番号	第113集							
編著者名	菊池古修							
編集機関	静岡県埋蔵文化財調査研究所							
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市谷田23 20 TEL 054-262-4261(代)							
発行年月日	西暦1998年10月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °°'	東経 °°'	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
水掛渡古墳群C群	静岡県 島田市 湯日・船木	市町村	遺跡番号	34度 47分 31秒	138度 12分 5秒	19970801 19980206	3200 (確認調査対象面積含む)	静岡空港県 単独整備事 業
所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
水掛渡古墳群C群	古墳	古墳時代 後期	横穴式石室	須恵器・玉類・耳環・ 刀子・鉄鏃・刀装具		横穴式石室を内部主 体とする3基の円墳		

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第113集

水掛渡古墳群C群 (静岡空港C地点)

平成9年度静岡空港単独整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1998年10月31日

編集発行 財団法人
静岡県埋蔵文化財調査研究所
印刷所 黒船印刷株式会社
〒422-8033 静岡県静岡市登呂2丁目4-25
TEL 054-286-0236㈹